

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第279集

大里郡 岡部町

熊野遺跡(A・C・D区)

岡部町岡中央団地関係埋蔵文化財発掘調査報告

〈第3分冊〉

2 0 0 2

埼玉県住宅供給公社

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目次

<第1分冊>

口絵

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1
1. 調査に至るまでの経過	1
2. 発掘調査と報告書作成の経過	2
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	3
II 遺跡の立地と環境	4
1. 地理的環境	4
2. 歴史的環境	5
III 遺跡の概要	11
1. 調査の方法	11
2. 基本層序	11
3. 遺跡の概要	11
IV 熊野遺跡A区の調査	17
1. 竪穴住居跡(古代)	26
2. 竪穴状遺構(中世)	208
3. 掘立柱建物跡(古代)	226
4. 掘立柱建物跡(中世)	283
(第2分冊)	
5. ビット列	295
6. 溝跡	297
7. 土壌	316
8. 井戸跡	371
9. 道路跡	374
10. 特殊遺構	384
11. A区ビット出土遺物	426
12. A区グリッド・表採出土遺物	427
V 熊野遺跡C区の調査	430

1. 竪穴住居跡(古代)	430
2. 竪穴状遺構(中世)	553
3. 掘立柱建物跡(古代)	554
4. 掘立柱建物跡(中世)	577
5. ビット列	582
6. 溝跡	583
7. 土壌	598
8. 土壌墓	609
9. 特殊遺構	609
10. ビット・グリッド出土遺物	611

(第3分冊)

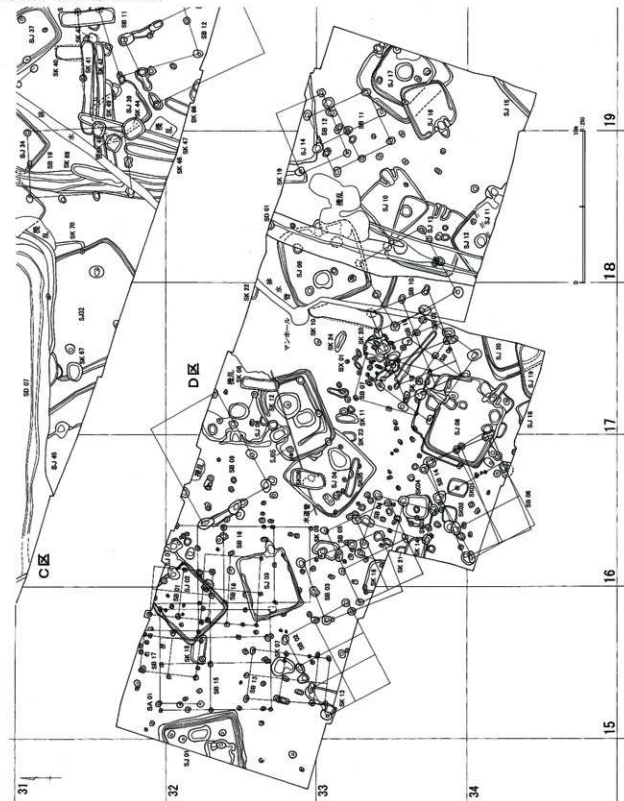
VI 熊野遺跡D区の調査	613
1. 竪穴住居跡(古代)	614
2. 掘立柱建物跡(古代)	659
3. 掘立柱建物跡(中世)	671
4. ビット列	680
5. 溝跡	681
6. 土壌	682
7. 特殊遺構	686
8. ビット・グリッド出土遺物	686
VII その他の遺物	688
VIII 調査のまとめ	690
附編	723
写真図版	
付図	

VI 熊野遺跡D区の調査

D区の概要

熊野遺跡D区は、A区とC区の間に位置する。測

第489図 熊野遺跡D区全測図



査区は長方形で南側中央が突出する。調査面積約800㎡。調査区はほぼ平坦で、標高約53.5～54m。

検出された遺構は竪穴住居跡20軒、掘立柱建物跡19棟、ピット列1条、溝跡2条、土壇23基、特殊遺構1基である。竪穴住居の存続時期は7世紀後半～9世紀末乃至10世紀初頭頃までで、A区・C区の様相とほぼ同様である。攪乱で半壊していた第6号住居跡からは土師質の陶棺と思われる小破片が出土している。陶棺とすれば県内2例目となろう。第8号住居跡にはカマド脇に棚状施設が設けられており、土師器甕が出土した。また、第16・17号住居跡からは多量の土器が投棄された状態で検出されている。

1. 竪穴住居跡 (古代)

D区第1号住居跡 (第490図)

D区第1号住居跡は調査区西端の31・32-14・15グリッドに位置する。住居西半は調査区外に延びている。第1号土壇は床面下まで掘り込まれ、断面観察により、住居覆土を切っていることが判明した。

平面形態は方形系と推定され、残存規模は長軸長5.46m、短軸長3.90m、深さ0.35mである。主軸方位はN-10°-Wを指す。

床面は概ね平坦で堅く締まっていたが、南壁際はやや凹凸があり軟弱である。埋土は第1層は住居を切る土壇埋土、第2層は住居埋土と思われる、ローム粒子が多量に含まれていた。

カマドは検出されなかった。

ピットは5本検出された。Pit 1・2は主柱穴と考えられる。Pit 3・4の帰属は不明である。Pit 5は位置的に貯蔵穴となる可能性が高い。土師器甕が落ち

掘立柱建物跡は古代のものが12棟、中世のものが7棟ある。中世の建物は調査区の西部に集中する傾向があり、主軸方位が座標北に近い方向を指すものが多い。C区第7号溝跡の南辺(南溝)に規制されている可能性もあり、注意して良い現象である。

溝跡は2条あり、第1号溝跡はC区第9号溝跡の延長部に相当する。部分的に硬化面の痕跡が残り、道路跡として使用されたことが窺われる。

土壇は23基あり、古代～中世を主体に、一部近世以降のものが含まれる。第12号土壇は上幅1.60mほどで柱穴状に1.78m掘り込まれていた。性格は不明確であるが、井戸跡としても良いかもしれない。

込んだ状態で出土している。

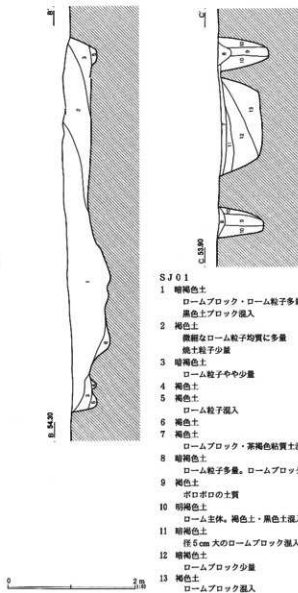
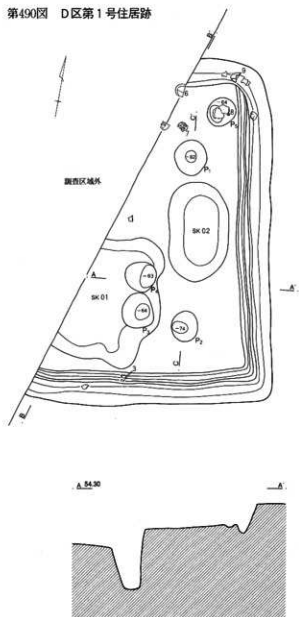
壁溝は壁の立ち上がり部分よりもやや内側に巡っていた。壁溝上面は貼床されており、住居を拡張したものと推定される。

出土遺物は量的には多くない。土師器杯・甕、須恵器盤・高台盤がある(第491図)。1は土師器模倣杯である。2～4は口縁部が内屈または内彎する北武蔵型杯。5・6は須恵器盤。5は焼きが甘く、底部は手持ちヘラケズリ調整。6は灰色に堅く焼き上がっている。底部は回転ヘラケズリ調整。7は高台盤である。口縁部と高台を欠く。見込部は磨滅し、黒色に変色している。墨痕とすれば、明らかに転用碗である。いずれも末野産。8・9は土師器甕。長胴甕である。須恵器は17片出土し、碗1点、高台盤1点、無台盤5点、壺・瓶類4点、甕6点(いずれも末野産)である。住居跡の時期は熊野I期と考えておきたい。

第177表 D区第1号住居跡出土遺物観察表 (第490図)

0	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師杯	(11.0)	2.4		AB	A	淡褐色	10%	覆土
2	土師杯	(11.0)	2.6		AB	A	淡褐色	15%	覆土
3	土師杯	12.0	3.8		AB	A	褐色	90%	No.12-13, 覆土下層十ほぼ床面
4	土師杯	(12.0)	3.7		B	B	褐色	25%	覆土
5	須恵盤	(24.0)	2.6		B片	B	黄褐色	20%	覆土, 末野産
6	須恵盤	(20.6)	3.4		B片	B	灰色	50%	No.8, 床面, 末野産
7	須恵高台盤		1.9		B片	A	灰色	50%	No.7, ほぼ床面, 末野産, 内面磨滅, 転用碗
8	土師甕	(20.5)	10.4		AB	A	淡褐色	35%	Pit 5No.2
9	土師甕		11.9		AB	B	褐色	70%	No.1・2・3, 覆土下層

第490図 D区第1号住居跡



- S J 0 1
- 1 暗褐色土
ロームブロック・ローム粒子多量
黒色土ブロック混入
 - 2 褐色土
鉄錆なローム粒子均質に多量
焼土粒子少量
 - 3 暗褐色土
ローム粒子やや少量
 - 4 褐色土
 - 5 褐色土
ローム粒子混入
 - 6 褐色土
 - 7 褐色土
ロームブロック・茶褐色粘質土混入
 - 8 暗褐色土
ローム粒子多量。ロームブロック少量
 - 9 褐色土
ボロボロの土質
 - 10 暗褐色土
ローム主体。褐色土・黒色土混入
 - 11 暗褐色土
径5cm大のロームブロック混入
 - 12 暗褐色土
ロームブロック少量
 - 13 褐色土
ロームブロック混入

D区第2号住居跡 (第492図)

D区第2号住居跡は31・32-15・16グリッドに位置する。重複する第1・15・16・18号掘立柱建物跡、第18号土壌に切られていた。当初、東カマドをもつ超長方形の住居跡と考え、掘り進めたところ、壁ラインに直交する壁溝とカマドの痕跡が検出され、断面観察によっても埋土が著しく異なることが判明し、2軒の重複と判断した。新旧関係はカマドの遺存状態と土層観察から南側の第2号住居跡を壊して北側の第7号住居跡が構築されたものと考えられる。

第2号住居跡の平面形態は長方形で、規模は長軸

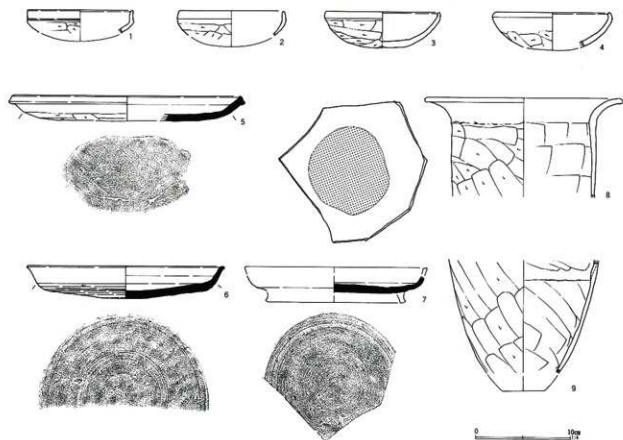
長4.32m、短軸長3.65m、深さ0.25mである。主軸方位はN-47°-Eを指す。

床面は概ね平坦で全体に堅く踏み固められていた。埋土は下層にロームブロック、上層にローム粒子が多量に含まれ、人為的に埋め戻された可能性がある。

カマドは北東壁に設けられていたが、上面を第7号住居跡跡跡に削平されており、遺存状態は極めて悪い。埋土は焼土と炭化物混じりの黒褐色土が堆積していた。袖は遺存しない。

ピットはカマド脇から1本検出されたが、伴うか

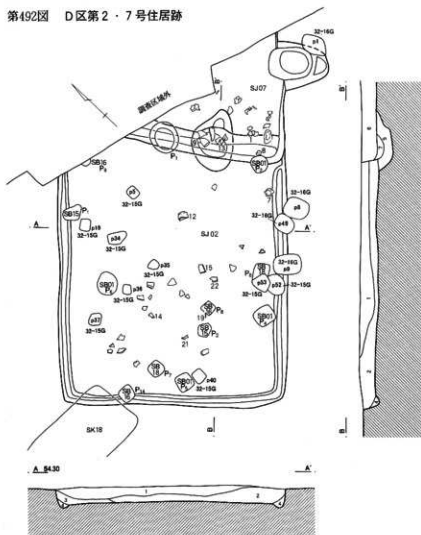
第491图 D区第1号住居跡出土遺物



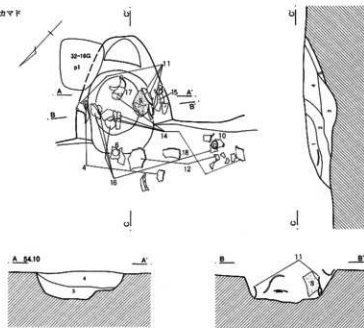
第178表 D区第2号住居跡出土遺物観察表 (第493・494図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	覆土	備考
1	土師環	(10.0)	2.0		B	A	淡褐色	10%	覆土	
2	土師環	(12.0)	2.6		B	A	淡褐色	10%	覆土	
3	土師環	(12.0)	2.3		AB	A	褐色	10%	覆土	
4	土師暗文環	(10.0)	2.6		AB	A	赤褐色	15%	覆土。内面放射暗文(下→上)右回り	
5	土師暗文環	(13.0)	3.8		AB	A	赤褐色	10%	覆土。内面暗文	
6	土師環	(13.0)	3.0		AB	A	淡褐色	10%	覆土	
7	須恵環	13.3	3.5	7.5	B針	A	灰色	60%	No.14。覆土中層。南比金産	
8	須恵蓋		1.7		B	B		30%	覆土	
9	須恵広口壺	(18.0)	4.0		B片	A	茶灰色	10%	覆土。末野産。口縁直下沈線1条巡る	
10	須恵壺	(14.0)	2.8		B	A	灰色	10%	覆土。末野産か	
11	須恵甕	(23.0)	5.6		B片	A	灰色	10%	覆土。末野産	
12	須恵甕	(25.6)	9.2		B片	A	灰色	20%	No.16。床面。末野産	
13	須恵甕		3.6		B片	A	青灰色		覆土。末野産。外面自然釉。内面同心円当て具	
14	須恵甕		7.9		B片	A	暗灰色		No.28。覆土上層。末野産。外面縦斜格子(平行)印き	
15	須恵甕		5.0		B片	A	青灰色		No.21。覆土中層。末野産。外面平行印き十カキ目	
16	須恵甕		4.4		B片	A	暗灰色		覆土。末野産。沈線+櫛描波状文	
17	須恵甕		4.4		B片	A	暗灰色		覆土。末野産。沈線+櫛描波状文	
18	須恵甕		3.1		B片	A	暗灰色		覆土。末野産。沈線+櫛描波状文	
19	不明鉄製品	No.25。残長5.0cm。棒状								
20	須恵甕		6.1		B F	A	灰色		覆土。秋間産か。外面平行印き・内面同心円文当て具後ナデ	
21	須恵甕		8.5		B F	A	灰色		No.27。秋間産か。平行印き・同心圓文当て具後ナデ。	
22	須恵甕		7.2		B F	A	灰色		No.20。秋間産か。平行印き・同心圓文当て具後ナデ	

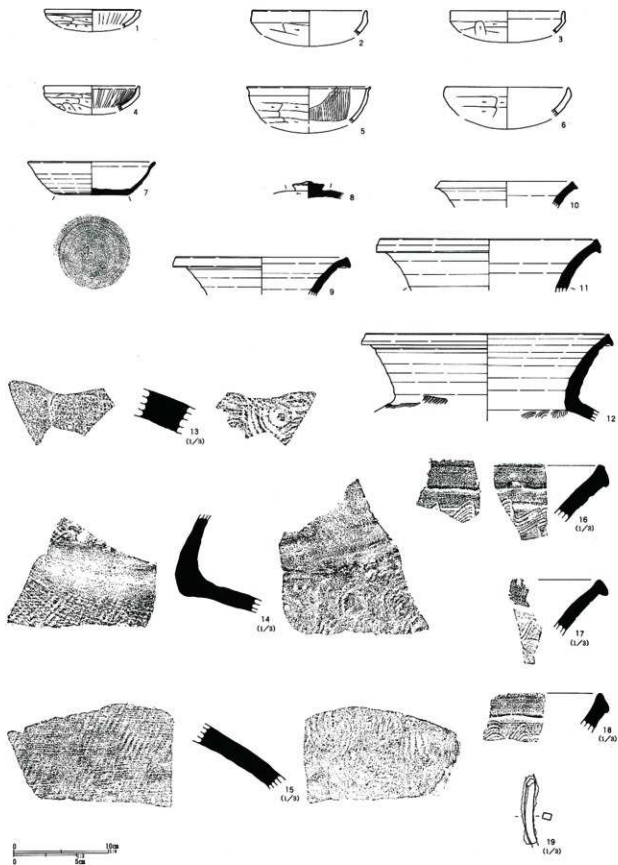
第492図 D区第2・7号住居跡



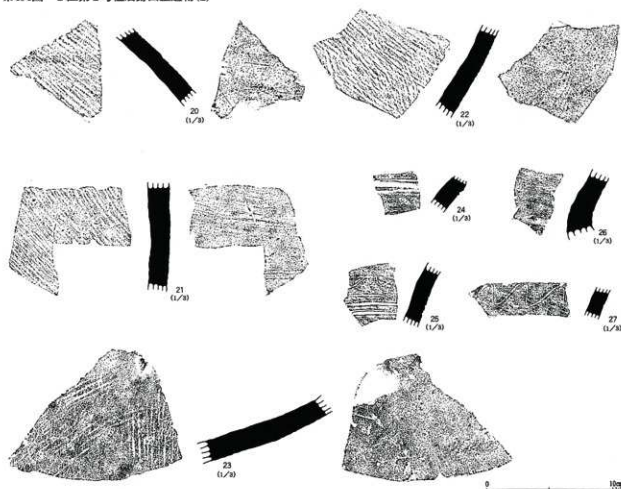
SJ07 カマフ



第493图 D区第2号住居跡出土遺物(1)



第494図 D区第2号住居跡出土遺物(2)



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
23	須恵甕		5.4		B F	A	灰色		No.22. 秋間産か。平行印き・ナデ
24	須恵甕		2.7		B F	A	灰色		覆土。秋間産か。沈線2条。素地土は比較的緻密
25	須恵甕		5.1		B F	A	灰色		覆土。秋間産か。2本組櫛描波状文、沈線4条
26	須恵甕		5.6		B F	A	灰色		覆土。秋間産か。素地土は比較的緻密
27	須恵甕		2.5		B F	A	灰色		覆土。秋間産か。2本組櫛描波状文

否か不明。他に小ビットが多数掘り込まれていたが、いずれも中世の所産である。壁溝はカマドの付く北東壁が不明瞭であるが、他は巡っていた。

出土遺物は土師器環・暗文環、須恵器環・壺・壺・甕、鉄製品がある(第493・494図)。土師器環及び暗文環はいずれも細片で伴う可能性は低い。須恵器環(7)は唯一器形の判明する資料である。推定口径13.3cm、底部は全面回転ヘラケズリ調整される。9~18・20~27の須恵器壺・甕は全て小破片に割られた状態で覆土中から出土した。故意に破砕したものを投棄した可能性がある。住居跡の時期は出土した須恵器環

から熊野Ⅲ期と考えておきたい。

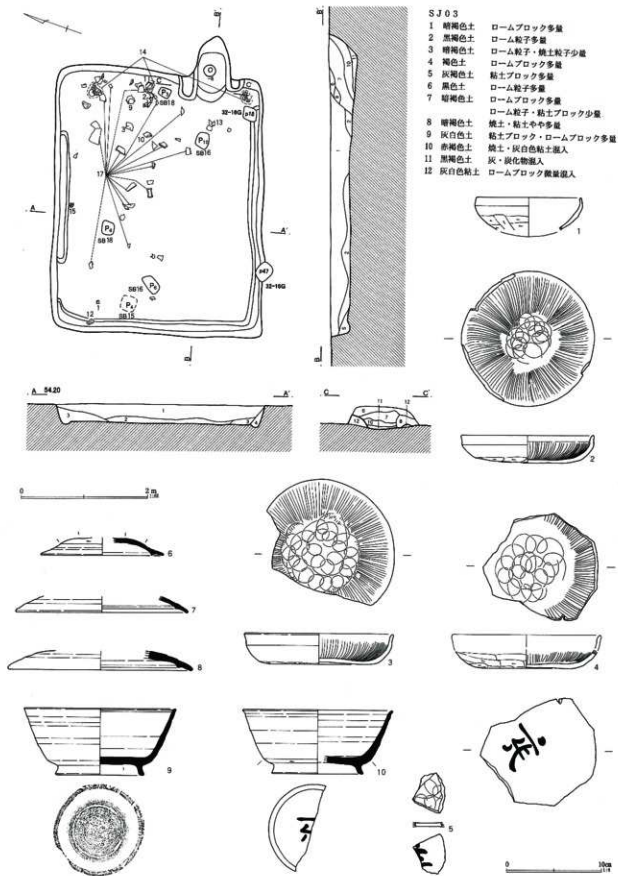
D区第3号住居跡(第495図)

D区第3号住居跡は32-15-16グリッドに位置する。重複する第15・16-18号掘立柱建物跡に切られていた。

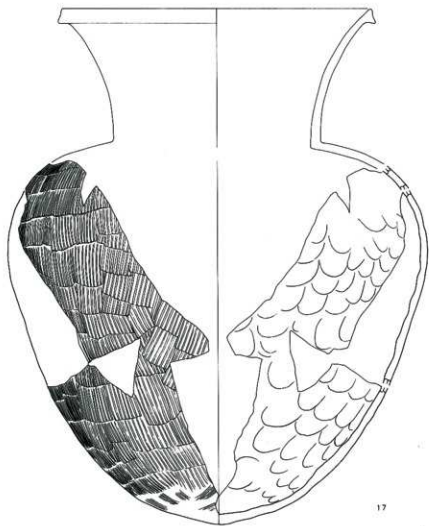
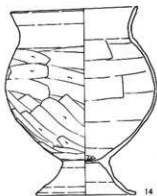
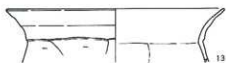
平面形態は長方形で、規模は長軸長4.20m、短軸長3.36m、深さ0.30mである。主軸方位はN-75°-Eを指す。

床面は概ね平坦で、全体に堅く踏み固められていた。特にカマド前面から住居中央部にかけては顕著であった。埋土は第1・2層にロームブロックとロー

第495図 D区第3号住居跡・出土遺物(1)



第496图 D区第3号住居跡出土遺物(2)



第179表 D区第3号住居跡出土遺物観察表(第495・496図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(11.0)	3.4		AB	A	淡褐色	15%	No2. 覆土中層
2	土師暗文環	13.9	2.9		BG	B	褐色	90%	No40・44+カマド。覆土下層+床面+カマド内
3	土師暗文環	(15.6)	3.2		BG	B	褐色	50%	No27. ほぼ床面。内面螺旋+放射暗文
4	土師暗文環		2.0		BG	B	赤褐色	20%	No51. 中層。内面螺旋+放射暗文。外面墨書
5	土師暗文環				B	A	赤褐色		覆土。内面螺旋+放射暗文。外面墨書
6	須恵蓋	(13.0)	1.8		B片	B	灰色	15%	覆土。末野産
7	須恵蓋	(18.0)	1.7		B片	A	灰色	10%	カマド。覆土。末野産。
8	須恵蓋	(18.2)	2.0		B片	B	灰色	10%	覆土。末野産
9	須恵高台碗	(16.0)	7.0	9.0	B片	B	淡褐色	60%	No28. 下層。末野産
10	須恵高台碗	(15.6)	6.7	9.4	B片	B	暗青灰色	35%	No26. ほぼ床面。末野産。底部外面墨書
11	須恵高台環		1.5	9.4	BC針	A	灰色	95%	No33. ほぼ床面。南比企産。外底面磨滅。転用視
12	土師甕	(23.0)	6.2		BG	A	褐色	15%	No1. 覆土中層。
13	土師甕	23.0	5.6		BG	A	褐色	10%	No21. ほぼ床面
14	土師小型台付甕	13.4	19.7		ABC	B	暗褐色	70%	カマド+カマド前面+No18・35・55(下層~床面)
15	土師台付甕		3.5	(9.4)	B	A	赤褐色	55%	No8. 覆土上層。
16	須恵甕	(10.0)	3.5		B片	A	灰色	10%	覆土。末野産。
17	須恵大甕		38.1		B片	A	青灰色	40%	No3・7他。覆土中層+下層。末野産。外面平行叩き

ム粒子が多量に含まれ、人為的に埋め戻された可能性がある。

カマドは東壁の南側に寄った位置に設けられている。燃焼部は壁を切り込み、奥壁は急角度で立ち上がる。底面には小ピットが穿たれていた。支脚を埋設した痕跡かもしれない。埋土は第7・10層が天井部崩落土、第11層が灰層となろう。袖は灰白色粘土が使用されていた。

ピットは2本検出されたが、いずれも中世のものである。壁溝は南壁から西壁にかけて検出されたが、一部途切れている。

出土遺物は土師器環・暗文環・甕・台付甕、須恵器高台碗・高台環・蓋・甕がある(第495・496図)。出土遺物は住居北半に多い。17の甕は破片が広範囲に散在し、出土状況から北東部から投棄された可能性が高い。

1の土師器環、6～8の須恵器蓋は混入と思われる。2～5は平底暗文環。内面に放射暗文と螺旋暗文が施文される。4・5の底面には墨書があるが、判読できない。類似した字は熊谷市北高遺跡で出土しており、「正合」または、「天」の異体字にも似ている。9・10は末野産の須恵器高台碗。9は口唇部が内傾する端面をもち、その直下に沈線が巡る。底部は糸切り後周辺部を回転ヘラケズリ調整される。体部下端まで削られていた可能性があるが、高台接合に

伴うナゲで不明確である。10は口唇部の端面はもたない。底部は糸切り痕を残すが、体部下端は回転ヘラケズリ調整されている。底部外面には土師器暗文環と同一墨書が記されている。

11は須恵器高台環。坏部の外縁がカッティングされ高台内面が磨滅していることから転用視として使用されたものと思われる。南比企産。12・13は土師器甕。14は小型台付甕。17は大型甕の胴部から底部片である。底部は丸底で、外面平行叩き、内面無文当て具痕が残る。

須恵器は117片出土した。坏が6点(末野)、高台碗2点(末野)、高台環1点(南比企)、蓋13点(末野)、甕95点(末野)である。

住居跡の時期は熊野Ⅲ期新段階～Ⅳ期と考えておきたい。

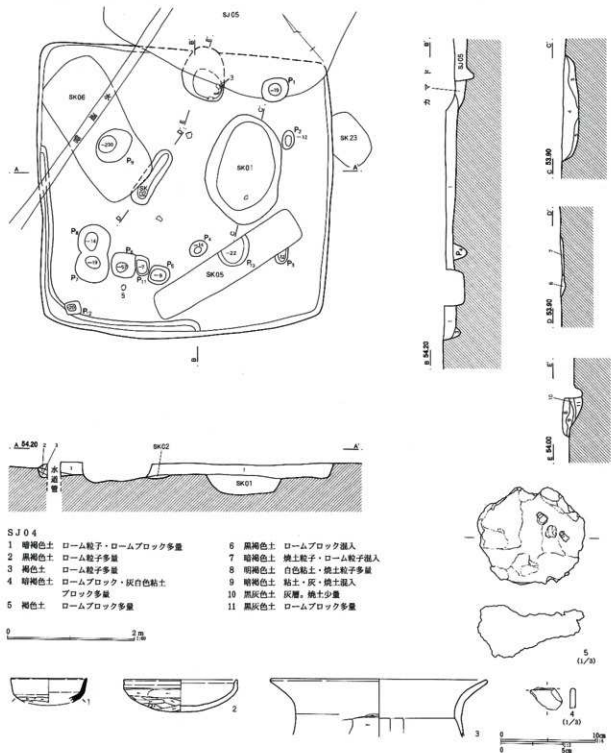
D区第4号住居跡(第497図)

D区第4号住居跡は32・33-16・17グリッドに位置する。北コーナー部は現代の道路跡と水道管の撓乱を受けていたほか、第2・5・6号土壌、第5号住居跡に切られており、遺存状態はあまり良くない。

平面形態は方形で、規模は長軸長4.68m、短軸長4.56m、深さ0.23mである。主軸方位はN-40°-Eを指す。

床面は平坦で良く踏み固められていた。埋土は口

第497図 D区第4号住居跡・出土遺物



第180表 D区第4号住居跡出土遺物観察表 (第497図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵坏	(7.8)	2.5		BF	A	灰白色	10%	確認面, 産地不明(群馬産か)。底部手持ちケズリ
2	土師坏	(11.8)	3.3		AB	B	褐色	30%	確認面
3	土師甕	(22.5)	6.0		AB	B	茶褐色	20%	No.1-9. カマド内
4	不明鉄製品	確認面。縦1.6cm。横2.0cm。厚さ0.4cm。板状							
5	鉄洋	No.5。床面。長径9.5cm。短径7.6cm。厚さ4.1cm。重量247.07g。色調茶褐色							

ームブロックを多量に含む暗褐色土を基調としており、人為的に埋め戻された可能性が高い。

カマドは北東壁に設置されたものと思われ、焼土粒子・白色粘土混じりの掘り込みが検出されたが、大半は第5号住居跡に削平されており詳細は不明である。

ビツは12本検出された。Pit 9は第6号土壇底面で検出された。深さ2.30mにも及び井戸状遺構とした方が良いであろう。Pit 3～6・11・12は中世の所産である。主柱穴は不明確である。第1号土壇は上面に貼床され、床下土壇と考えられる。埋土には白色粘土ブロックが多量に含まれていた。

壁溝は南西壁から北西壁にかけてL字状に巡っていた。

出土遺物は非常に少なく、土師器環・甕、須恵器環、鉄製品、鉄滓がある(第497図)。1・2・4は確認面から出土したもので、帰属関係は不明確である。1は須恵器のいわゆる環Gである。非常に小振りであり、底部は手持ちヘラケズリ調整。やや砂っぽい胎土で灰白色に焼き上がる。産地不明であるが、群馬産か。2は暗文環系の環で内面は無文。3はカマド内から出土した甕で、本住居に伴うと考えられる。4は不明鉄製品。5は床面から出土した鉄滓。椀型滓と思われる。

住居跡の時期は不明確であるが、第5号住居跡との関係などから熊野Ⅰ期に遡る公算が大きいと思われる。D区第5号住居跡(第498図)

D区第5号住居跡は32・33-16・17グリッドに位置する。住居上面を現代の道路跡と水道管の攪乱を受けていた。重複する第6号住居跡を切り、第8・12号土壇に切られていた。

平面形態は横長の長方形で、規模は長軸長5.52m、短軸長3.72m、深さ0.27mである。主軸方位はN-24°-1Wを指す。

床面は中央部が平坦であるが、壁際は凹凸が目立

ち、やや軟弱であった。埋土はロームブロックを多量に含む褐色土で、埋め戻された可能性が高いものと判断した。

カマドは北西壁に設けられていた。燃焼部はほぼ壁内に納まり、底面は皿状に掘り込まれていた。埋土は第1～3層が天井部崩落土、第4層が灰層に相当する。袖は黄灰色粘土と明褐色土を積み上げて構築されていた。

ビツは3本検出されたが、いずれも主柱穴になるものではない。土壇は1基住居中央付近から検出された。上面は貼床されており、埋土にはロームブロックが多量に含まれていた。住居に伴う床下土壇と思われる。

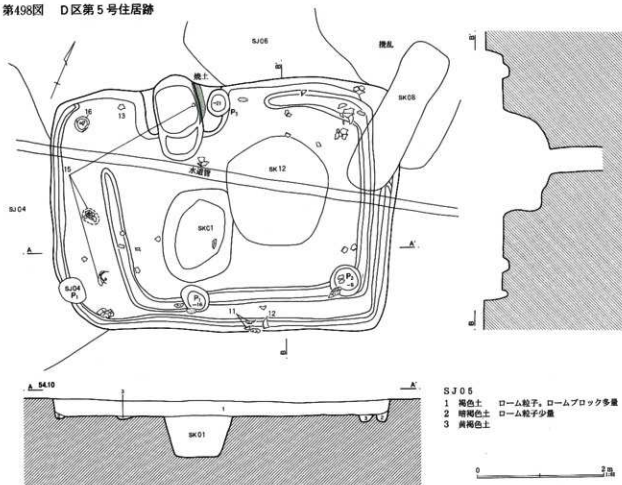
壁溝は二重に巡っていた。内側のそれは上面に貼床されており、拡張前の壁溝と考えられる。

出土遺物は土師器環・暗文環・暗文皿・甕、須恵器環と編物石がある(第499図)。1・2は統比企型環。口縁部外面と内面は赤彩されている。3・4は有段口縁環で、口縁部の段は退化している。5は暗文環系土器であるが暗文はない。6は椀タイプの環。7・8は北武蔵型環。9は暗文環で、内面放射暗文が施文される。10は内面と外面の一部にヘラミガキ調整。内面黒色処理される環で、非在地的な土器である。11・12は暗文皿である。13は須恵器環。口径18cmと大振り、やや深身である。底部は回転ヘラケズリ調整される。末野産で焼きは良い。14から16は土師器甕。長胴甕で、16は胴部上半に膨らみをもつ。17は編物石の集成。住居全体に散在していた。

須恵器は22片出土し、環が12点(末野)、蓋1点(末野)、壺瓶類3点(末野2・東海1)、器種不明1(群馬?)、甕5点(末野)である。

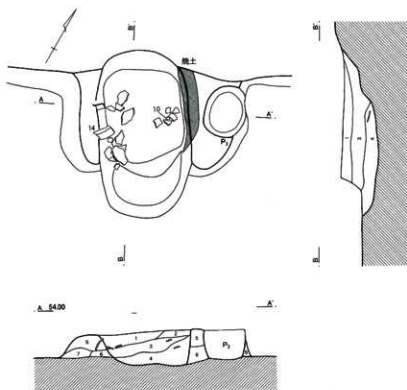
出土遺物は熊野Ⅰ期が主体となるが、須恵器環はⅡ期古段階とすべきかもしれない。住居の構築時期は熊野Ⅰ期と考えて良からう。

第498図 D区第5号住居跡



SJO5

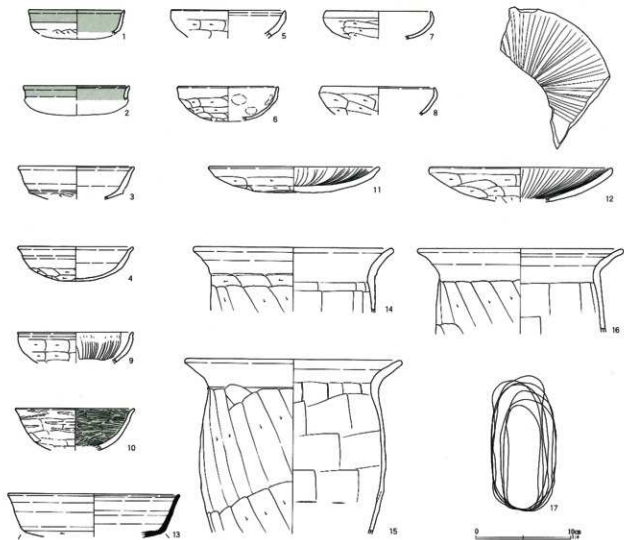
- 1 褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量
- 2 暗褐色土 ローム粒子少量
- 3 黄褐色土



カマF

- 1 褐色土 焼土粒子少量
- 2 灰白色土 焼土・焼土粒子少量
- 3 灰白色土 焼土ブロック多量
- 4 黒色土 灰・粘土粒子混入。灰層
- 5 黄灰色土 粘質土
- 6 明褐色土 粘質土・ロームブロック混入
- 7 明褐色土 粘質土多量

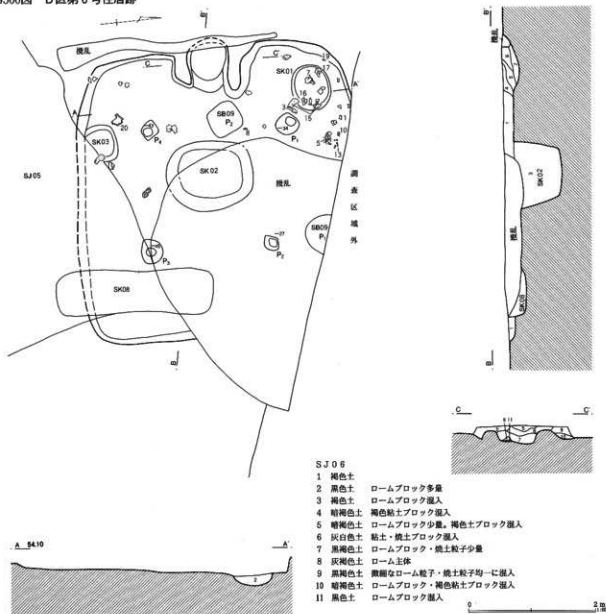
第499図 D区第5号住居跡出土遺物



第181表 D区第5号住居跡出土遺物観察表 (第499図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(10.0)	2.6		B D	B	褐色	10%	SJ5内SK12. 統比金型環。内面口縁外面赤彩
2	土師環	(11.0)	1.5		B	A	赤褐色	5%	カマド内。統比金型環。口縁内面凹む。内外面赤彩
3	土師環	(12.0)	3.4		A B	A	明褐色	10%	覆土。有段口縁
4	土師環	(12.0)	3.6		A B	B	褐色	25%	覆土。有段口縁
5	土師環	(12.0)	2.9		A B	A	褐色	15%	覆土
6	土師環	(10.5)	3.6		A B	B	褐色	30%	覆土
7	土師環	(11.0)	2.9		A B	B	褐色	20%	カマド
8	土師環	(11.8)	2.9		A B	B	褐色	20%	覆土
9	土師暗文環	(12.0)	3.2		A B	A	明褐色	15%	覆土。内面放射暗文
10	土師内黒環	(12.4)	4.4		D	B	褐色	35%	カマド内No14。外面ヘラズリ後ミガキか。光沢あり
11	土師暗文皿	(18.0)	2.7		A B	A	明褐色	50%	No33-44。覆土上層+中層。内面放射暗文
12	土師暗文皿	(19.0)	3.6		A B	A	明褐色	30%	No32。覆土中層。内面放射暗文
13	須恵環	(18.0)	4.5	(14.8)	A B C	A	灰色	15%	No8。覆土上層。未野産
14	土師甕	(20.8)	6.7		A B	B	褐色	25%	カマド内No7
15	土師甕	22.4	18.3		A B	B	淡褐色	40%	No1-40・カマド内No.16。覆土上層+下層+カマド
16	土師甕	21.4	9.0		A B	B	褐色	85%	No5。床面

第500図 D区第6号住居跡



D区第6号住居跡 (第500図)

D区第6号住居跡は32-16・17グリッドに位置する。住居北東部は調査区外に延びている。また、東半は攪乱によって大きく抉られており、遺構の遺存状態は極めて悪い。重複する第5号住居跡、第9号掘立柱建物跡及び第8号土壌に切られていた。

平面形態は方形と推定され、規模は長軸長4.56m、短軸長4.32m、深さ0.18mである。主軸方位はN-80°-Wを指す。

床面は概ね平坦でカマド前面は比較的堅く踏み固められていた。埋土は褐色土主体でロームの混入は

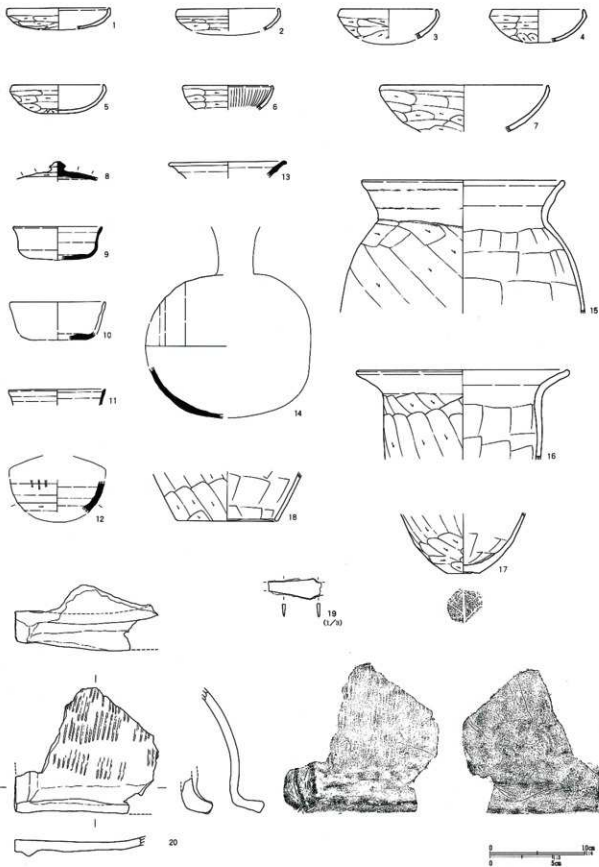
少ない。

カマドは西壁に設けられ、燃焼部はほぼ壁内に納まる。埋土は第4～6層が天井部崩落土、第7層は流入土か。明確な灰層は残されていなかった。袖はロームを掘り残して構築されていた。

ピットは4本検出された。Pit 2の配置がややずれ、浅いものに対応する柱穴はなく、いずれも支柱穴と考えておきたい。

土壌は3基検出された。1号土壌と3号土壌は掘り方の可能性もある。2号土壌は上面に貼床され、埋土にはロームブロックが多量に含まれていた。床

第501图 D区第6号住居跡出土遺物



第182表 D区第6号住居跡出土遺物観察表(第501図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(10.8)	2.2		AB	A	橙褐色	20%	No.30. 覆土上層
2	土師環	10.7	2.2		AB	A	橙褐色	15%	Pit1
3	土師環	(10.1)	3.0		AB	A	茶褐色	35%	No.13. 覆土中層
4	土師環	(9.7)	3.4		AB	A	暗褐色	15%	覆土
5	土師環	(9.7)	3.0		AB	A	褐色	15%	No.35. 覆土上層
6	土師暗文環	(9.4)	2.6		AB	A	橙褐色	15%	カマド。内面放射暗文
7	土師環	(17.7)	4.9		AB	A	茶褐色	20%	No.20-21. 覆土下層+ほぼ床面
8	須恵蓋		2.1		B	A	灰色	30%	No.10. 床面。末野産か。宝珠つまみ
9	須恵環	(9.3)	3.5		B片	A	灰白色	10%	覆土。末野産
10	須恵環		0.9	(6.0)	B片	A	茶褐色	25%	No.31. 覆土上層。末野産。底部へラ切り後ナデ
11	須恵環	(10.1)	1.7		B	A	暗灰色	10%	覆土。末野産
12	須恵縁		3.5		BF	A	明灰色	15%	覆土。湖西産か。胴部歯状工具による列点文通る
13	須恵長頸瓶	(12.0)	1.7		B	A	灰白色	15%	No.32. 覆土上層。湖西産か。自然釉
14	須恵長頸瓶		5.4		BF	A	灰色	15%	覆土。湖西産か。D区SJ9に同一個体あり
15	土師壺	(21.2)	14.0		AB	B	橙褐色	40%	No.14-16-17. 覆土上層+上層+下層
16	土師甕	(22.1)	9.4		AB	A	褐色	20%	No.15. 覆土下層
17	土師甕		6.3	3.4	AB	A	褐色	70%	No.22. 覆土上層。底部木葉痕。
18	土師瓶		5.2	(10.5)	AB	A	橙褐色	15%	カマド
19	刀子	No.23. 覆土中層。残長4.2cm							
20	陶棺	No.1. 確認面。末野産。残長15.1cm。残高13.3cm。胎土G片。焼成A。褐色。土師質							

下土壌と思われる。壁溝は検出されなかった。

出土遺物は土師器環・暗文環・壺・甕・瓶・須恵器環・蓋・長頸瓶・縁・異形土製品、鉄製品がある(第501図)。1~5は丸底形態、内屈口縁の北武蔵型環である。口径10cm前後と小振りで、口縁直下からケズリが入る。7は同タイプの大型品。6は小振りの暗文環。内面放射暗文が施文される。8は須恵器蓋。宝珠つまみが付く。末野産と思われる。9~11は須恵器環G。9は推定口径9.3cmと小振りで、底部はへラ切り後ナデ調整か。10も底部へラ切り後ナデと思われる。12は縁か。体部下位は回転へラケズリ、歯状工具による列点文が施文される。湖西産か。13は口縁部が緑帯となる瓶類。内外面に自然釉が掛かる。湖西産であろう。14は外面全体に自然釉が掛かる瓶類胴部片。プラスチック瓶となろうか。釉調は13と似る。湖西産と思われる。15は土師器壺。16・17は土師器甕である。18は瓶。19は刀子である。切先と柄部を欠く。20は異形土製品。図上で左側端と底面が面取りされ、その上部は湾曲している。左側端は断面三角状に粘土で補強され、底面は折り返されている。外面は平行叩き、内面は同心円文当て具痕を縦面にナデ消し

ている。土師質の焼きで、黒斑状の変色部がある。通常の容器とは明らかに異なり、陶棺の屋蓋部が最も可能性が高いものとする。胎土に片岩状の鉱物を含む。同一個体と思われる破片はD区第10号住居跡、C区第34号住居跡とD区第32-17グリッドから出土した。

須恵器は19片出土した。環は12点(末野)、蓋1点(末野)、瓶類2点(湖西)、縁1点(湖西)、甕3点(末野)である。

住居跡の時期は熊野I期と考えられる。

D区第7号住居跡(第492図)

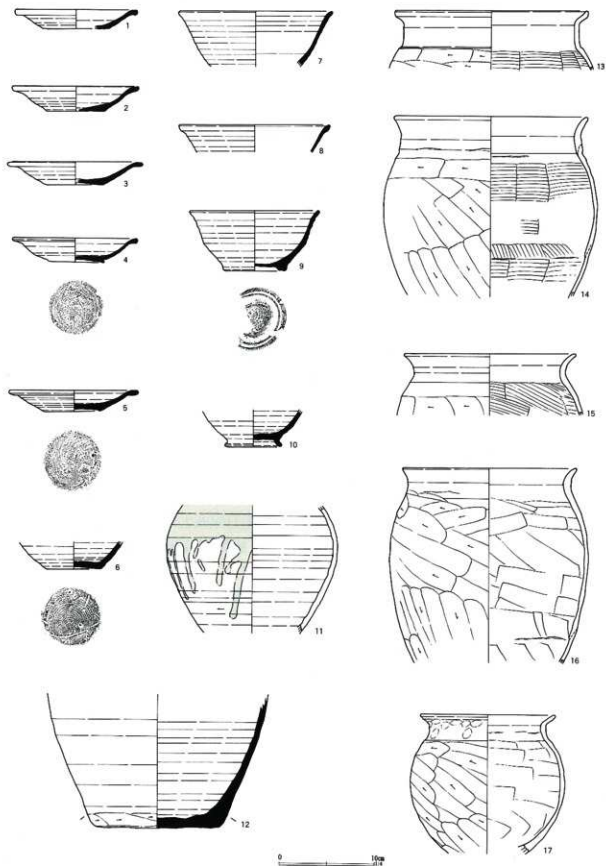
D区第7号住居跡は31・32-16グリッドに位置する。調査区北端にあり、大半は調査区外に延びている。第2号住居跡と重複し、本住居跡の方が新しい。

平面形態は方形系と推定され、残存規模は長軸長2.55m、短軸長2.04m、深さ0.25mである。主軸方位はN-140°-Eを指す。

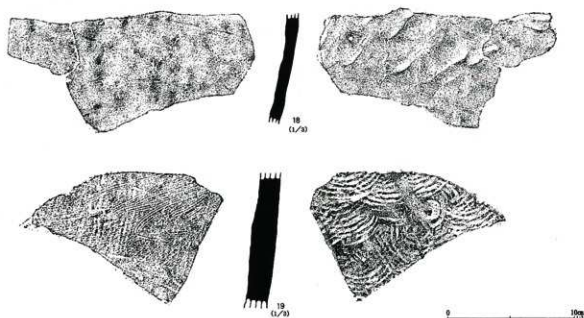
床面は平坦で堅く踏み固められていた。埋土はローム粒子と焼土粒子混じりの暗褐色土である。特に埋め戻された形跡は認められなかった。

カマドは南東壁に設けられていた。燃焼部は壁外

第502图 D区第7号住居跡出土遺物(1)



第503図 D区第7号住居跡出土遺物(2)



第183表 D区第7号住居跡出土遺物観察表 (第502・503図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵皿	(12.7)	2.0	(7.0)	B F片	A	青灰色	20%	No10, 覆土中層
2	須恵皿	(13.1)	2.6	(5.9)	B片	B	灰色	25%	カマF前, 未野産
3	須恵皿	(13.2)	2.4	(6.0)	B D片	D	褐色	50%	SJ7(カマF前)+SJ2, 未野産
4	須恵皿	13.0	2.6	5.7	B C D片	A	青灰色	95%	カマF内No2-No7, 未野産
5	須恵皿	13.5	2.3	5.7	B C D片	A	灰色	100%	カマF, 未野産
6	須恵環		2.9	5.9	B	A	淡黄灰色	70%	カマF内No5, 産地不明, 砂っぽい土で混和材少ない
7	須恵高台碗	(16.0)	5.8		B片	D	濃灰色	25%	SJ7(Na13)+SJ2, 下層, 未野産
8	須恵高台碗	(15.8)	2.9		B片	A	青灰色	25%	SJ7(カマF前)+SJ2, 未野産
9	須恵高台碗	13.6	6.3	6.2	B片	B	褐色	25%	SJ7(Na3), 覆土下層, 未野産, 軟質
10	須恵高台碗		3.9	5.7	B片	B	褐色	65%	No16, 床面, 未野産
11	灰釉長頸瓶		13.5		B F	A	淡灰色	60%	カマF内No22, 撥投産, 外面淡黄緑色の灰釉
12	須恵甕		14.1	(13.0)	B D F片	B	青灰色	25%	カマF内No4-18, 未野産
13	土師甕	(20.2)	6.1		A B	A	褐色	25%	No7, 覆土下層
14	土師甕	20.0	18.7		A B	B	褐色	15%	カマF内(Na11+Na12+Na17), No15, 下層
15	土師甕	(18.0)	6.4		A B	A	褐色	30%	カマF内No19
16	土師甕	(18.2)	20.5		A B G	A	褐色	20%	No17(床面), カマF内(Na8+Na9+Na13)
17	土師小型甕	(13.9)	14.6		A B	A	褐色	30%	カマF内No15, 台付甕
18	須恵甕				B C片	B	暗青灰色	15%	カマF内No1, 未野産
19	須恵甕				B片	A	青灰色		SJ7 (No4), 未野産, 内面と破断面の一部が磨滅

に突出し、側壁の一部はPitの攪乱を受けている。埋土は第1・2・4層が天井部崩落土、第3層が灰層である。壁内の袖は検出されなかった。左右の側壁内側には同一個体の灰釉陶器胴部片が壁を押さえるように据えられていた。右側壁は灰釉陶器の内側を礎で留めていた。

住居に伴うピットはない。壁溝は南西壁に巡っていた。

出土遺物は土師器甕・小型甕、須恵器皿・環・高台碗・甕、灰釉陶器長頸瓶がある(第502-503図)。カマF内及びその周辺からまとまって出土している。1~5は須恵器皿。口縁部は大きく外反し、底部は回転糸切り無調整である。6は環。7~10は須恵器高台碗である。9の高台は低く幅広で退化的である。10はやや小振りの高台碗となろう。11は灰釉陶器長頸瓶である。淡緑色の釉が掛かり、胴部下位は回転

ヘラケズリ調整される。猿投産、K-90号窯式と考えられる。12は平底甕。底部と胴部下端は粗い手持ちヘラケズリ調整。末野産である。13～16は土師器甕。13は「コ」の字状口縁甕の形態を保っているが、14～16は口縁部の屈曲が弱まり、退化傾向が現れている。17は小型台付甕。脚部が欠落している。

住居跡の時期は熊野Ⅵ期と考えられる。

D区第8号住居跡(第504・505図)

D区第8号住居跡は33・34-16・17グリッドに位置する。重複する第6・8・14号掘立柱建物跡を切り、第7・19号掘立柱建物跡に切られていた。住居跡北壁から西壁にかけては住居の周囲にシミ状のラインが廻り、当初住居跡の切り合いと考えたが、掘り込みが浅く、堅い床面は形成されていなかった。また壁ラインが住居の軸にもほぼ一致することから、住居跡に伴う壁外の掘り込みと認識した。

住居の平面形態は長方形で、規模は長軸長5.58m、短軸長4.26m、深さ0.60mである。西壁部の張り出しは長さ0.30m、深さ0.09m、北壁部の張り出しはカマドの周囲とその外側、2段に形成されていた。張出部の長さは1.26m、深さは0.18mである。主軸方位はN-126°-Eを指す。

床面はやや凹凸をもつが、全体に堅く踏み固められていた。埋土第2層にはローム粒子が均一に含まれていたが、特に埋め戻された形跡は認められなかった。

カマドは2基検出された。第1号カマドは北壁に設けられていた。燃焼部は壁を切り込んで設けられ、先端部は急角度で立ち上がる。燃焼部の左右には壁外の掘り込みが伴い、第1層はカマド上面と掘り込みの双方を覆っていた。住居に伴う櫛状施設と考えられる。埋土は第2～4層が天井部崩落土、第5層が灰層である。カマド埋土は住居覆土に切られており、袖も全く遺存していないことから第1号カマドが古いことが判明した。

第2号カマドは東壁の南寄りに設けられていた。カマドの両側の壁は掘り残されており、カマドの向きは住居主軸に対してやや傾いていた。おそらく、

第1号カマドから第2号カマドに付け替えた際に、東壁を拡張したものと考えられる。結果的に燃焼部は壁内に納まり、煙道部先端が僅かに突出する構造となる。埋土は第2・3層が天井部崩落土、第4層が灰層に相当する。側壁は強く被熱していた。燃焼部側壁両側には粘土が貼られ、袖を構成していた。

また、燃焼部側壁の両側は櫛状施設が造り付けられていた。向かって右側の櫛には土師器甕が2個体、土師器台付甕が1個体伏せた状態と横倒しの状態で据え置かれていた。

ビットは2本検出されたが、支柱穴となるものではない。土壌は2基検出された。1号土壌は第2号カマドの右脇にあり貯蔵穴の可能性がある。深さは0.25m。壁溝は住居西半と東壁の一部に巡っていた。

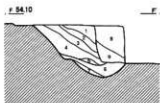
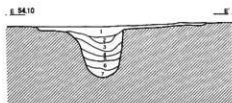
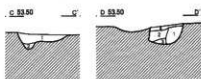
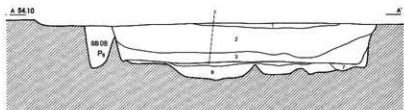
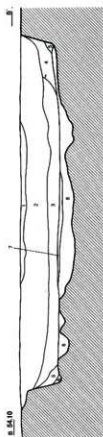
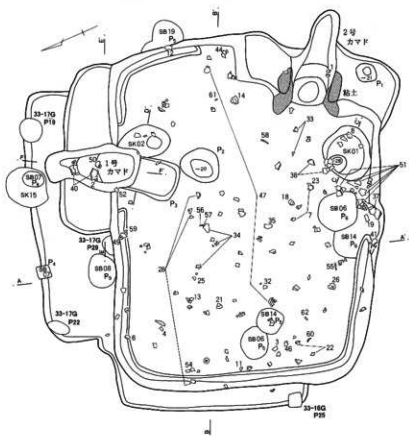
出土遺物は多く、主に覆土中から出土した。土師器環・暗文環・甕・小型台付甕・ミニチュア土器、須恵器環・皿・高台碗・蓋・長頸瓶・鉢・鉄製品、砥石がある。

1～4は土師器環。4は混入。1・3は口縁部が外反する。2は口縁部が直立するタイプで、1・3よりも型的には古い。5は内面に暗文が施されている。6は浅い皿タイプである。7～20は須恵器環。底部は回転糸切り後無調整で、口径に対する底径比が1/2以下に縮小したものが主体を占めている。9は南比企産、他は末野産である。21・22は大型の皿。23・25・26は高台碗。24は灰釉陶器である。器種が不明確。口唇端部を外に折り、内面の灰釉を刷毛塗りしている。三河以東産でK-90号窯式併行と思われる。27～32は須恵器高台碗蓋である。33は須恵器長頸瓶。素地土は灰白色で精選される。産地不明。

34は須恵器鉢。35は灰釉陶器長頸瓶胴部片。非東濃産。内面黒色粒子が吹き出している。

36～41・43・51・52は土師器「コ」の字状口縁甕。42はやや小型品。44～50は小型台付甕と思われる。口縁部の形状は「コ」の字状口縁甕を意識している。36・42・48はカマド右脇の櫛上から出土した。53はミニチュア土器。54はほぼ床面から出土した鎌。基部上端を内側に折り返している。55～58は刀子。58は刃部

第504図 D区第8号住居跡



- SK 01
 1 茶褐色土 粘質土ブロック・ロームブロック混入
 2 褐色土 ロームブロック多量

- SK 02
 1 褐色土 ロームブロック小混入
 2 褐色土 ロームブロック混入
 3 明褐色土 ローム粒子少量
 4 褐色土 ロームブロック・茶褐色粘質土ブロック混入(粘床)

SJ 08

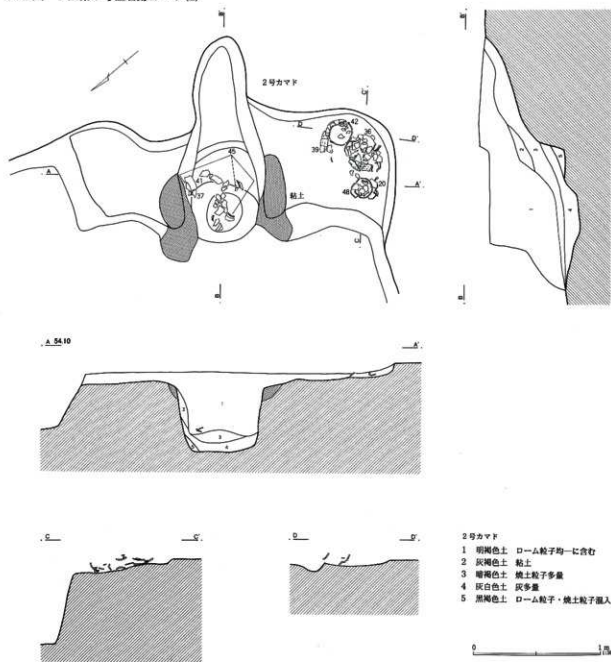
- 1 黒褐色土 火山灰・焼土粒子多量
- 2 明褐色土 ローム粒子均一に混入
- 3 明褐色土 焼土粒子・炭化物粒子やや多量
- 4 褐色土 ロームブロックやや多量、焼土
- 5 明褐色土 ロームブロック
- 6 褐色土 ロームブロック多量
- 7 褐色土 ロームブロック・茶褐色粘質土ブロック混入(粘床)
- 8 黄褐色土 ロームブロック・茶褐色粘質土多量(粘床)

1号カマド

- 1 褐色土 ローム粒子多量
- 2 褐色土 ロームブロック多量
- 3 灰褐色土 粘土、焼土粒子混入
- 4 暗赤褐色土 灰土(焼納部~煙道部)
- 5 黒色土 灰・炭・焼土混入、灰層
- 6 灰褐色土 粘土・炭化物少量
- 7 黒褐色土 ローム粒子多量
- 8 明褐色土 ローム粒子均一に混入、焼土粒子・炭化物粒子やや多量(住居覆土2層に対応)
- 9 明褐色土 焼土粒子・ロームブロックやや多量(住居覆土3層に対応)

0 2m

第505図 D区第8号住居跡カマド(2)



- 2号カマド
- 1 明褐色土 ローム粒子均一に含む
 - 2 灰褐色土 粘土
 - 3 暗褐色土 粘土粒子多量
 - 4 灰白色土 灰多量
 - 5 黒褐色土 ローム粒子・粘土粒子混入

が折れ曲がっている。59は刀子柄部と思われる。60は不明鉄製品。留金具か。上端を捻って環部を作り出している。61・62は鉄釘。63は砥石である。

須恵器は604片出土し、環が369点(末野366・南比企1・不明2)、高台椀32点(末野30・群馬?1・不明1)、皿25点(末野)、高台皿1点(末野)、蓋68点(末野)、甕81点(末野)、壺・瓶類24点(末野16・南比企1・不明7)、鉢4点(末野)である。

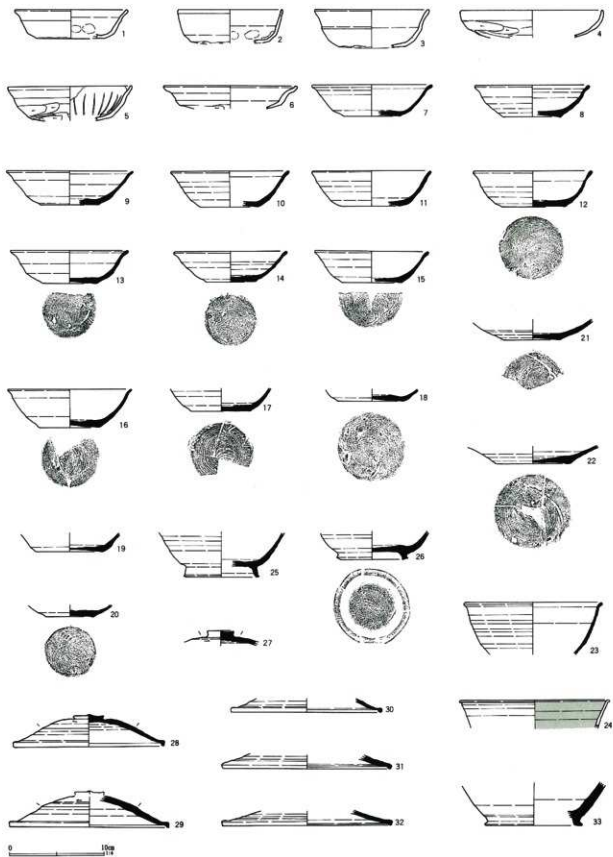
住居跡の時期は熊野VI期と考えられる。

D区第9号住居跡 (第509図)

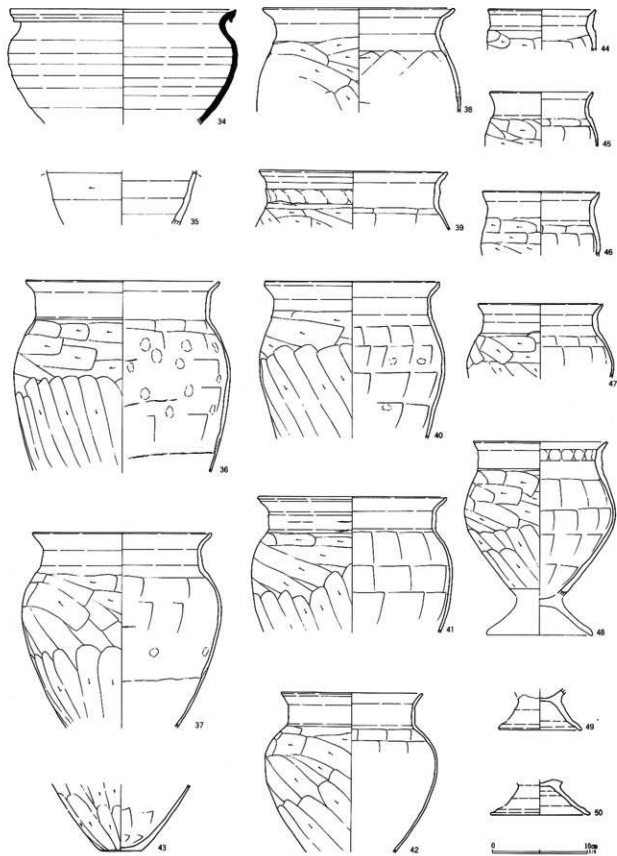
D区第9号住居跡は32・33-16・17グリッドに位置する。第1号溝跡他の攪乱を受け遺存状態はあまり良くない。また、重複する第10号掘立柱建物跡、第10号土壌に切られていた。

平面形態は方形で、規模は長軸長5.40m、短軸長5.16m、深さ0.25mである。主軸方位はN-73°-E

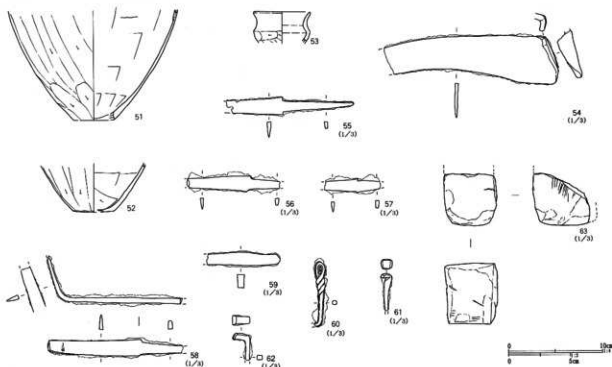
第506图 D区第8号住居跡出土遺物(1)



第507图 D区第8号住居跡出土遺物(2)



第506図 D区第8号住居跡出土遺物(3)



第184表 D区第8号住居跡出土遺物観察表(第506~508図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師鉢	(11.8)	3.0		AB	A	暗茶褐色	45%	No58. 覆土上・下層。油煙痕あり
2	土師環	(11.0)	3.5		BC	A	暗淡褐色	25%	1号カマド内No5. 底部剥離しているため厚さ復元
3	土師環	(12.0)	4.0		ABDE	A	褐色	20%	No12. 覆土中層
4	土師環	(15.0)	2.9		BC	A	暗褐色	20%	No28. 覆土上層
5	土師暗文環	(13.0)	3.6		A	A	褐色	20%	覆土上。内面粗い放射暗文
6	土師皿	(14.0)	2.4		AB	A	黄褐色	15%	No30. 覆土上層
7	須恵環	(12.6)	3.3	(6.0)	B片	A	茶褐色	20%	No69-72. 覆土上層+上層。末野産
8	須恵環	(12.0)	3.3	(6.0)	BC片	A	灰色	35%	No109. 覆土上層。末野産
9	須恵環	(13.2)	3.6	(6.0)	針	A	灰色	15%	確認面。南比金産
10	須恵環	(12.4)	3.8	(6.0)	BC片	B	灰白色	15%	確認面。末野産
11	須恵環	(12.4)	3.7	(6.0)	BC片	A	灰色	15%	No118. 覆土中層。末野産
12	須恵環	(12.4)	3.7	6.7	BC片	A	灰色	45%	No54. 覆土上層。末野産
13	須恵環	(12.4)	3.4	5.6	BC片	A	黄土色	30%	No25. 覆土上層。末野産
14	須恵環	(11.8)	3.2	5.2	B D G片	A	茶色	50%	No131. ほぼ確認面。末野産
15	須恵環	(11.9)	3.3	6.4	BC片	A	暗灰色	35%	確認面。末野産
16	須恵環	(12.9)	4.0	6.2	BC片	B	灰白色	40%	覆土上。末野産
17	須恵環		2.4	6.2	B片	A	灰色	65%	覆土上。末野産
18	須恵環		1.3	6.9	BC片	A	淡灰色	100%	No71. 上層。末野産
19	須恵環		2.0	7.0	B片	A	淡灰色	80%	No76(覆土中層)+覆土上層+中層。末野産
20	須恵環		1.2	5.1	B片	A	茶色	100%	2号カマドテラスNo4. 末野産
21	須恵皿		2.1	6.0	BC片	A	暗灰色	40%	No23. 覆土上層。末野産
22	須恵皿		1.9	7.5	BC片	A	明灰色	85%	No7-8. 覆土上層。末野産
23	須恵高台椀	14.4	5.5		B片	A	灰色	35%	No72. 覆土上層。末野産
24	灰軸(器種不明)	(15.5)	3.0		B	A	灰白色	5%	覆土上。三河以東産。内面灰釉刷毛塗り。外面無釉
25	須恵高台椀	4.7	(7.4)		B C D	A	黄灰色	25%	No86. 覆土上層。末野産
26	須恵高台椀	3.0	6.3		B C片	A	黄灰色	80%	No126. ほぼ確認面。末野産
27	須恵蓋	1.6			B片	A	明灰色	20%	覆土上。末野産
28	須恵蓋	(15.8)	3.3		BC片	A	灰色	35%	No22-39-40. 覆土中層+中層+中層。末野産

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
29	須恵蓋	(16.8)	3.3		B C片	B	黄灰色	20%	覆土。末野産
30	須恵蓋	(15.7)	1.5		B片	A	暗灰色	10%	覆土上層+中層。末野産
31	須恵蓋	(17.7)	1.5		B D片	C	黄灰色	15%	覆土上層+中層。末野産
32	須恵蓋	(17.8)	1.5		B片	C	黄灰色	15%	№16(覆土上層)+覆土上層+中層。末野産
33	須恵長頸瓶		4.5	(9.9)	B	A	灰白色	20%	№60-62。覆土上層+上層。産地不明
34	須恵鉢	(23.8)	12.1		B C片	A	暗灰色	40%	№41-44-87(覆土上層+上層)+上中層。末野産
35	灰釉長頸瓶		5.7		B F	A	明灰色	20%	№67。覆土中層。猿投→三河産(非東濃)
36	土師甕	20.4	20.0		A B	B	暗褐色	50%	2号カマドテラス№2。内面指押さえ痕多数
37	土師甕	18.8	20.5		A B	B	橙褐色	50%	№99。2号カマド内№2。テラス他。覆土中層
38	土師甕	(20.0)	10.8		A G	B	褐色	25%	№105-106。覆土下層+下層
39	土師甕	(19.7)	6.1		A B G	B	褐色	30%	2号カマドテラス№6
40	土師甕	(18.3)	16.5		A B	B	淡褐色	55%	1号カマド内№1・3
41	土師甕	(19.7)	14.5		A B	A	橙褐色	20%	2号カマド内№1。№98。覆土中層
42	土師小型台付甕	(14.8)	16.8		A B G	B	褐色	70%	2号カマドテラス№3
43	土師甕		7.1	4.4	A B	A	橙褐色	40%	1号カマド
44	土師小型台付甕	(11.2)	4.3		B C	B	明褐色	25%	№55。覆土上層
45	土師小型台付甕		10.8	5.7	A G	B	褐色	50%	2号カマドテラス№6
46	土師小型台付甕		12.2	6.7	A B D	B	暗褐色	65%	№10他。覆土上層
47	土師小型台付甕		13.1	7.8	A	B	褐色	50%	№111-124覆土上層+中層+下層+床面
48	土師小型台付甕		14.1	16.2	A B D	B	褐色	70%	2号カマドテラス№1
49	土師小型台付甕		4.4	8.5	B C	A	褐色	75%	№34。覆土上層
50	土師小型台付甕		3.7	10.4	B C D	A	褐色	65%	1号カマド内 №4
51	土師甕		11.5	4.3	A B G	B	褐色	80%	№101・128・100・103。覆土下層
52	土師甕		5.1	(4.2)	B C D	A	赤褐色	30%	№38。覆土中層
53	土師ニテア土器	(5.9)	3.3		A B	B	暗褐色	20%	覆土
54	鎌	№121。ほぼ床面。残長12.9cm。幅3.8cm							
55	刀子	№94。覆土中層。残長10.0cm							
56	刀子	№134。床面。残長7.3cm							
57	刀子	№134。床面。残長4.4cm							
58	刀子	№130。床面。残長10.6cm。折れ曲がる							
59	不明鉄製品	№135。覆土下層。残長5.8cm。刀子柄部か							
60	不明鉄製品	№6。覆土上層。残長5.1cm。径0.4cm。捻り環をつくる							
61	釘	№110。覆土中層。残長3.0cm							
62	釘?	№5。覆土中層。残長2.1cm							
63	礫石	長さ4.0cm、幅3.9cm、厚さ4.2cm。重量110g。凝灰岩製							

を指す。

床面は平坦で非常に堅く踏み固められていた。埋土は第2・6層中に灰白色粘土と黄灰色粘質土が堆積していた。投棄されたものであろう。

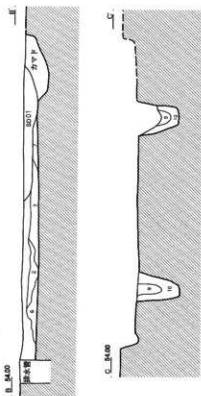
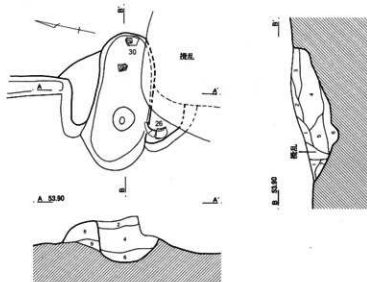
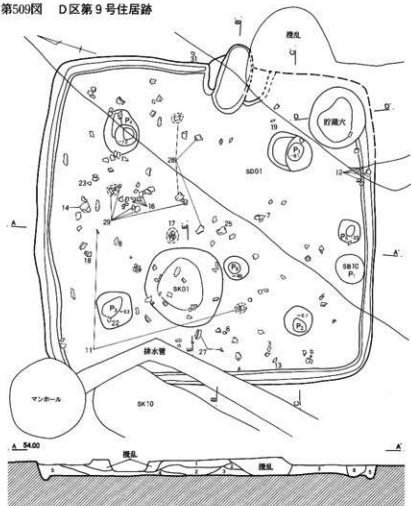
カマドは東壁に設けられていた。右袖部は攪乱により削平されている。燃焼部は壁を僅かに切り込んでいる。燃焼部底面には小ピットが穿たれており、支脚据え付け痕の可能性ある。埋土は第1～5層が天井部崩落土、第6・7層が灰層と考えられる。右袖は攪乱によりほとんど削平されていた。左袖はロームブロック混じりの灰白色粘土を積み上げて構築されていた。

ピットは6本検出された。Pit 1～4は主柱穴である。Pit 5・6の帰属は不明である。

貯蔵穴は南東コーナー部にある。上面は削平されていたが、直径0.96mの円形プランで、深さは0.18m。土壌は1基検出された。上面に貼床され、いわゆる床下土壌と考えられる。壁溝は残存部に関しては巡っていた。

出土遺物は住居内の全体から散在的に出土している。器種は土師器・杯・暗文環・暗文皿・鉢・壺・甕、須恵器・盤・長頸瓶、磁石がある(第510図)。1は純比企型環で、内面と口縁部外面は赤彩される。2・3は有段口縁環。2は内外面黒色で、黒色処理され

第509図 D区第9号住居跡



SJ09

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量。焼土少量
 - 2 灰白色粘土
 - 3 黒褐色土 粘土粒子・ローム粒子やや多量
 - 4 黒褐色土 粘土粒子・カーボン多量
 - 5 暗褐色土 ローム粒子やや多量
 - 6 黄灰色土 粘質土・ロームブロック混入
 - 7 褐色土 ローム粒子・粘土粒子少量
 - 8 褐色土
 - 9 暗褐色土 (柱痕)
 - 10 暗褐色土 ロームブロック
- 貯蔵穴
- 1 褐色土 ローム粒子・焼土微量
 - 2 褐色土 ロームブロックやや多量
- SK01
- 1 褐色土 ロームブロック混入

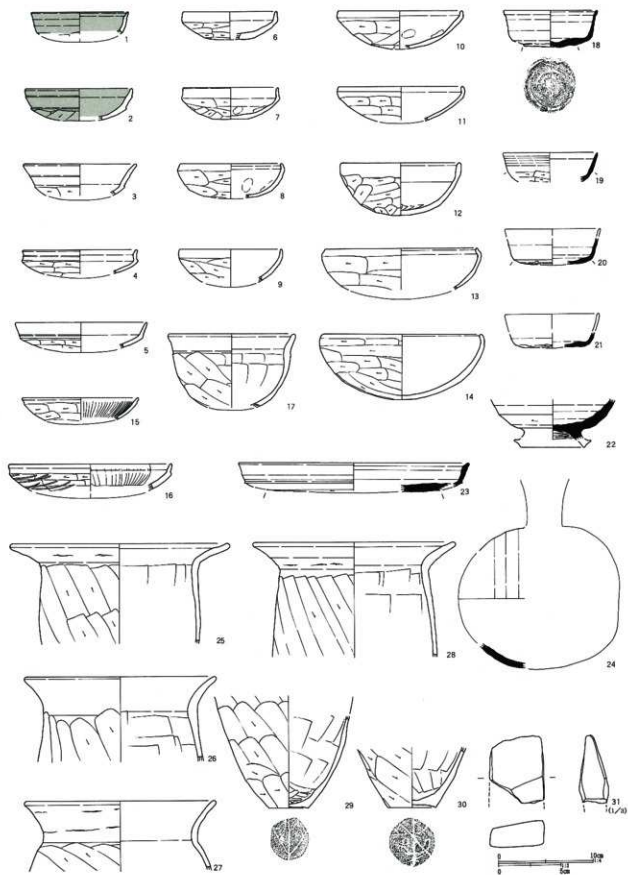
0 1m

カマド

- 1 褐色土 焼土・ローム粒子少量
- 2 褐色土 焼土・ローム粒子少量
粘土粒子混入
- 3 灰白色粘土
- 4 褐色土 焼土・粘土ブロック多量混入
- 5 褐色土 焼土ブロック多量
- 6 暗褐色土 ロームブロック・灰・炭化物混入
- 7 暗褐色土 ロームブロック・灰・炭化物混入
- 8 灰白色粘土 ロームブロック少量
- 9 暗褐色土 焼土・ロームブロック多量

0 1m

第510图 D区第9号住居跡出土遺物



第185表 D区第9号住居跡出土遺物観察表(第510図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(10.2)	2.3		B	A	茶褐色	5%	覆土。純比金型環。口縁外面と内面赤彩
2	土師環	(11.0)	3.3		G	B	暗褐色	10%	覆土。内外面黒色処理。有段環
3	土師環	(11.6)	3.3		ABG	A	赤褐色	15%	No93。覆土中層。有段環
4	土師環	(11.8)	2.5		BG	B	橙褐色	10%	覆土
5	土師環	(13.9)	2.7		B	A	淡褐色	15%	覆土
6	土師環	(9.8)	2.9		AB	A	淡褐色	30%	No99。ほぼ床面
7	土師環	(10.0)	3.3		AB	A	淡褐色	40%	No32。覆土下層
8	土師環	(10.6)	3.6		AB	A	褐色	30%	No68。床面
9	土師環	(10.7)	3.5		AB	A	淡褐色	15%	No47。下覆土層
10	土師環	(13.0)	4.0		AB	B	橙褐色	25%	覆土
11	土師環	(13.0)	3.5		AB	B	橙褐色	15%	No79-67。覆土中層+床面
12	土師碗	12.4	5.5		AB	A	淡褐色	60%	No21-22-23。覆土中層+ほぼ床面+床面
13	土師環	(16.0)	4.3		AB	B	橙褐色	5%	No91。覆土下層
14	土師碗	(16.7)	6.8		AB	A	淡褐色	50%	No51。覆土下層
15	土師暗文環	(12.0)	2.3		B	B	橙褐色	5%	覆土。内面放射暗文
16	土師暗文皿	(17.0)	2.8		BG	A	褐色	15%	No45。中層。体部外面ケズリ後ヘラミガキ。内面放射暗文
17	土師小型鉢	(13.0)	7.7		AB	B	暗褐色	15%	No73。床面。外面黒色あり
18	須恵環	9.7	3.9		BC片	A	灰色	60%	No66。床面。未野産。底部ヘラ切り無調整
19	須恵環	(10.0)	3.0		BC片	A	茶褐色	10%	No16。床面。未野産。体部下手持ちヘラケズリ
20	須恵環		2.7		BC片	B	灰色	15%	覆土。未野産。底部回転ヘラケズリ
21	須恵環		1.6		BC	A	灰色	15%	覆土。未野産。体部下手持ちヘラケズリ
22	須恵長頸瓶		4.2		F	A	灰色	15%	Pit3。秋間産か。脚部内面ヘラミガキ
23	須恵盤	(24.0)	3.0		BCF片	A	灰色	10%	No59。覆土中層。未野産
24	須恵瓶類		2.6		BCF	A	灰色	15%	覆土。湖西産。フラスコ瓶か
25	土師甕	(22.6)	10.5		ABG	B	橙褐色	20%	No35。覆土中層
26	土師甕	(20.0)	8.9		AB	A	橙褐色	45%	カマド内No3
27	土師甕	(19.8)	7.3		ABD	B	橙褐色	30%	No98-101。下層+床面
28	土師甕	(20.8)	12.0		AB	B	茶褐色	25%	No10-12-38-41。ほぼ床面+床面+床面+床面
29	土師甕		11.8	4.2	AB	B	暗褐色	80%	No39-46-50-51-123。床面。底部木葉痕
30	土師甕		6.3	5.0	ABC	A	暗淡褐色	60%	カマド内No1。外面黒斑あり。底部木葉痕
31	砥石	No13。SD1に帰属か。残長5.3cm。最大幅4.3cm。厚さ2.3cm。重さ54.5g。破面を除く全面平滑。凝灰岩製							

た可能性がある。4～7は模倣環である。8～11・13・14は内屈口縁の北武蔵型環と碗。12は碗である。15は暗文環で、内面に放射暗文が施文される。16は暗文皿。内面は放射暗文、底部外面にもミガキが入る。17は鉢。18～21は須恵器環、いずれも小振りで環Gである。底部調整はバラエティーがあり、18はヘラ切り後無調整、19は体部を手持ちヘラケズリで調整している。第10号住居跡に同一個体の破片がある。20は回転ヘラケズリ、21はヘラ切り後、体部下端のみ手持ちヘラケズリ調整している。18は床面出土。22は台付長頸瓶。脚部内面はヘラミガキが加わる。素地土は精良で、黒色粒子が吹き出す。秋間産か。23は盤。無台となるかどうかは不明。口縁部下端に

しっかりした稜が付く。24は瓶胴部片。全面に自然釉が掛かる。僅かに口縁部の立ち上がり部分が認められフラスコ瓶となる可能性がある。第6号住居跡14と同一個体と思われる。湖西産。25・26・28～30は土師器長頸甕。29・30は底部に木葉痕を残す。27は土師器甕である。31は砥石。よく使用され平滑。

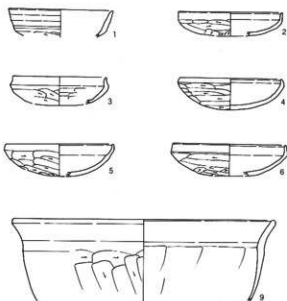
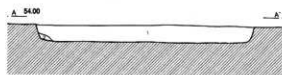
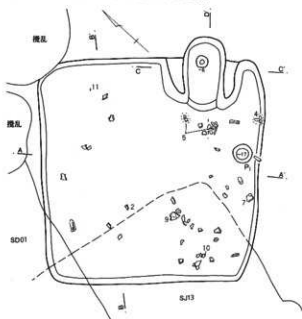
須恵器は31片出土し、坏が17点(未野)、蓋2点(未野)、盤2点(未野)、瓶類4点(未野1・秋間1・湖西2)、甕6点(未野)である。

住居跡の時期は熊野I期と考えられる。

D区第10号住居跡(第511図)

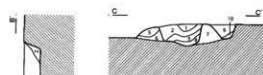
D区第10号住居跡は33-18グリッドに位置する。重複する第13号住居跡を切り、第1号溝跡と攪乱により一部削平されている。

第511図 D区第10号住居跡・出土遺物



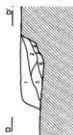
平面形態は方形で、規模は一辺3.60m、深さ0.27mである。主軸方位はN-49°-Eを指す。

床面は概ね平坦で全体に堅く踏み固められていた。埋土はロームブロックとローム粒子混じりの暗褐色土のほぼ単層で、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

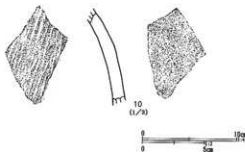


SJ10

- | | |
|---------|-------------------------|
| 1 暗褐色土 | ロームブロック・ローム粒子多量 |
| 2 褐色土 | ロームブロック多量 |
| カマド | |
| 1 暗褐色土 | ローム粒子主体 |
| | 焼土粒子・粘土粒子少量 |
| 2 灰白色粘土 | 焼熱粘土ブロック・焼土粒子・ロームブロック混入 |
| 3 暗褐色土 | 焼土粒子・焼土ブロック多量 |
| | ロームブロック少量 |
| 4 黄褐色土 | ロームブロック主体、褐色土混入 |
| 5 暗褐色土 | 粘土・焼土・ローム粒子少量 |
| 6 灰白色粘土 | ローム粒子微量 |
| 7 暗褐色土 | 粘土ブロック・ローム粒子やや多量 |
| 8 黒色土 | 灰・焼土混入 |
| 9 黒色土 | |
| 10 褐色土 | ロームブロック多量 |



0 2m



カマドは北東壁に設けられる。燃焼部は僅かに壁を切り込み、底面は平坦である。燃焼部中央付近には小ピットが穿たれていた。埋土は第1~3層が天井部崩落土、第8層が灰層である。袖は灰白色粘土と暗褐色土を主体に構築されていた。

ピットは1本検出されたが、柱穴ではなからう。

第186表 D区第10号住居跡出土遺物観察表(第511図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(11.0)	2.9		ABF	B	橙褐色	15%	覆土。有段口縁環
2	土師環	(10.9)	2.5		AC	B	明褐色	20%	No10。覆土上層
3	土師環	(9.8)	2.8		AB	B	褐色	5%	覆土
4	土師環	10.7	3.3		ABG	B	褐色	98%	No37。覆土下層
5	土師環	11.3	3.3		A	B	褐色	100%	No44-46。床面下層。外面全体黒斑
6	土師環	(11.8)	3.3		AB	B	褐色	25%	覆土
7	土師環	13.1	4.8		ABG	A	橙褐色	70%	No30。覆土下層
8	須恵環	(10.0)	2.9		BF	A	茶褐色	10%	覆土。末野産。SJ9に同一個体あり
9	土師瓶?	(27.7)	8.6		ABG	B	褐色	10%	No12。覆土上層
10	異形土製品	No25。覆土上層。胎土BE片。焼成A。褐色。土師質。外面平行叩き後ナデ 内面同心円文当具後ナデ。陶箱か							
11	刀子?	No1。覆土上層。残長4.2cm。刀子柄部か。一端折れ曲がり。欠損							

貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。

出土遺物は土師器環・甗?、須恵器環、鉄製品、異形土製品がある(第511図)。遺物量は少ない。1は有段口縁環。2・3は模倣環であるが、口縁部のつくりは北武蔵型環と同様である。4~7は北武蔵型環。底部は丸底で特に7は深身である。8は須恵器環G。体部は手持ちヘラケズリ調整される。第9号住居跡に同一個体がある。9は甗か。10は異形土製品。土師質で、外面平行叩き、内面同心円文当具の上を縦位にナデている。D区第6号住居跡20と胎土色調、調整技法が同一で、同一個体と思われる。陶箱か。11は刀子柄部か。一端が折れ曲がっている。

須恵器は7片出土し、環が3点、蓋が1点、甗が2点、鉢が1点である。いずれも末野産と思われる。

住居跡の時期は熊野I期と考えられる。

D区第11・12号住居跡(第512図)

D区第11・12号住居跡は33・34-18グリッドに位置する。重複する第13号住居跡を切り、第1号溝跡に上面を削平されていた。調査区際内にあり、大部分は調査区外に延びている。当初カマド左側に段差が見られ、埋土の色調変化が見られたことから2軒の重複と考え調査を進めたが、床面は同一レベルで続き、壁ラインも不鮮明であることから同一住居跡と認識した。

平面形態は方形系と推定され、残存規模は長軸長5.40m、短軸長2.88m、確認面からの深さ0.50mである。主軸方位はN-52°-Eを指す。

床面は平坦で堅く踏み固められていた。埋土は第2層に焼土粒子が多量に含まれ、第9・10層を完全に切っており、やや不自然な堆積である。

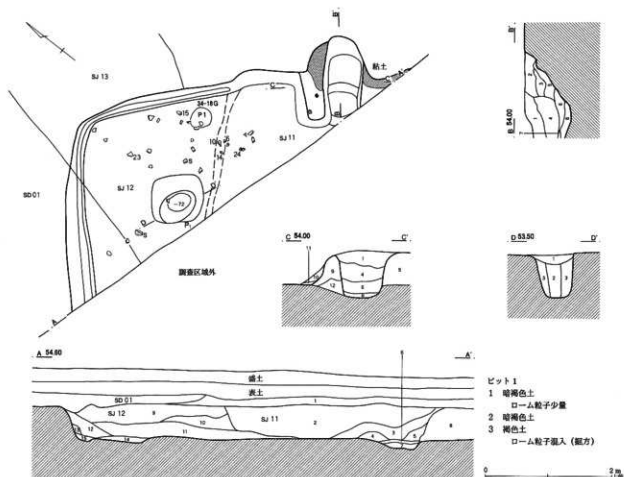
カマドは北東壁に設けられていた。燃焼部は壁を切り込んで構築されている。埋土は第1~6層が天井部崩落土、第7層が灰層となろう。袖は灰白色粘土を主体に構築されていた。

ピットは2本検出された。Pit1は主柱穴と考えられる。深さ72cmと深い。壁溝はカマド脇を除き巡っていた。

出土遺物は土師器環・皿・暗文環・甗、須恵器環・蓋、石製紡錘車がある(第512-513図)。1~7は口縁部が内屈または内彎気味の北武蔵型環。8~10は皿である。9は北武蔵型、10は暗文環系の皿であるが、暗文は省略されている。11~13は丸底形態の暗文環。内面に放射暗文が施文される。14~17は須恵器環。14は小型環で、底部は平底化している。底部全面回転ヘラケズリ。15は一回り大きい環で、弱い丸底風。やはり底部は全面回転ヘラケズリ調整されている。16は環Gか。底部及び体部下端回転ヘラケズリ。17は大型環と思われる。体部下端が回転ヘラケズリ。18~22は須恵器蓋。いずれもかえり蓋である。20~22は口径が不安定であるが、中型から大型型である。20の内面、かえりから天井部にかけては赤色顔料が塗布されている。朱墨とすれば転用碗の可能性がある。23は甗か。24は石製紡錘車である。

須恵器は104片出土したが、いずれも細片である。

第512図 D区第11・12号住居跡・出土遺物(1)



S J 11・12

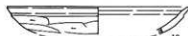
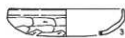
- 包含層(中世)
 1 暗褐色土 炭化物・焼土粒子多量
 2 暗褐色土 ローム粒子少量
 3 褐色土 白色粘土粒子・焼土粒子多量
 4 暗褐色土 ロームブロック・白色粘土ブロック混入
 5 灰白色粘土 焼土・ローム粒子やや少量
 6 灰色土 灰層
 7 灰白色粘土 盛り方
 8 灰白色粘土 ローム粒子・焼土粒子多量
 9 褐色土 ローム粒子少量・焼土粒子少量
 10 褐色土 ロームブロックやや多量
 11 暗褐色土 暗灰色土混入。ローム粒子やや多量
 12 暗褐色土 ローム粒子少量
 13 明褐色土 ローム粒子多量
 14 黄褐色土 (粘床)
 15 黒色土 ローム粒子混入

カマド

- 1 暗褐色土 灰白色粘土ブロック・焼土粒子やや多量
 (住居覆土 2層に対応)
 2 灰白色粘土 焼土ブロック多量
 3 灰白色粘土 焼土粒子・カーボン粒子・粘土ブロック
 少量(住居覆土 3層に対応)
 4 褐色土 焼土粒子少量。灰混入。灰層
 ブロック状。粘土混入。
 5 灰色土 灰層(住居覆土 6層に対応)
 6 褐色土 盛り方(住居覆土 7層に対応)
 7 灰白色粘土 焼土粒子・ローム粒子多量
 (住居覆土 8層に対応)
 8 灰白色粘土 炭化物多量
 9 褐色土 粘土多量
 10 灰白色粘土 ロームブロック混入

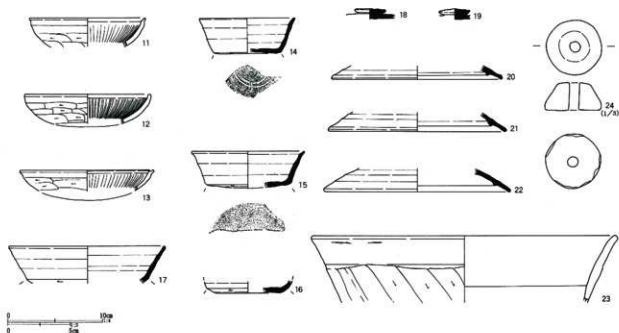
ビット 1

- 1 暗褐色土
 ローム粒子少量
 2 暗褐色土
 3 褐色土
 ローム粒子混入(縦方)



0 10cm

第513図 D区第11・12号住居跡出土遺物(2)



第187表 D区第11・12号住居跡出土遺物観察表 (第512・513図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(11.0)	2.3		A B	A	橙褐色	10%	覆土。素地土細かく精良だが在地産の範疇か
2	土師環	(11.0)	2.8		A B	B	橙褐色	15%	覆土
3	土師環	(12.0)	2.7		B	D	橙褐色	35%	覆土
4	土師環	(12.0)	3.5		A B	B	褐色	10%	覆土。全体に風化
5	土師環	(12.0)	3.5		A B	B	橙褐色	30%	覆土。指圧痕
6	土師環	(13.0)	3.5		B G	B	褐色	10%	SJ11(Na7)。覆土中層
7	土師環	(16.0)	4.2		A B	B	黄褐色	15%	覆土
8	土師皿	(16.0)	2.5		A B	B	橙褐色	20%	覆土
9	土師皿	(16.0)	3.5		A B	B	暗褐色	15%	カマド内
10	土師皿	(18.8)	2.9		A B C	B	橙褐色	15%	SJ11(Na8)。覆土中層
11	土師暗文環	(12.2)	3.0		B	B	橙褐色	15%	カマド内。内面放射暗文
12	土師暗文環	(13.0)	3.1		A B	B	茶褐色	20%	覆土。内面放射暗文
13	土師暗文環	(14.0)	2.2		A B	A	橙褐色	10%	覆土。内面放射暗文 硬質な焼き上がり
14	須恵環	(10.0)	3.7	(7.0)	B片	A	青灰色	15%	SJ11(Na9)。覆土中層。未野産。底部回転ヘラケズリ
15	須恵環	(11.8)	3.8	(8.4)	B片	C	淡灰色	20%	SJ12(Na9)。ほぼ床面。未野産。底部回転ヘラケズリ
16	須恵環		1.2	(6.8)	B片	B	灰色	10%	覆土。未野産。体部下位～底部回転ヘラケズリ
17	須恵環	(16.4)	3.9		B片	B	淡褐色	10%	カマド袖内。未野産
18	須恵蓋		1.1		B片	B	灰色	50%	カマド。未野産
19	須恵蓋		1.1		B C片	B	灰色	85%	覆土上層。未野産。つまみ径3.3cm
20	須恵蓋	(17.8)	1.4		B C片	B	灰色	50%	覆土。未野産。かえり内側赤色顔料塗布。朱墨か
21	須恵蓋	(18.6)	2.0		B片	A	灰色	5%	覆土。未野産
22	須恵蓋	(19.6)	2.4		B C D片	B	灰褐色	5%	覆土。未野産
23	土師瓶	(32.0)	7.0		A B	B	淡褐色	10%	SJ12(Na3。床面) + 覆土上層
24	石製紡錘車	SJ11(Na1。覆土下層)							最大径4.4cm。高さ2.1cm。孔径0.8cm。重さ62.4g。黒色。残存100%

内訳は坏が58点(未野57・東海1)、甕22点(未野)、蓋22点(未野)、盤1点(未野)、器種不明1点(未野)となる。

出土遺物は小片が多く時期決定は難しいが、5・

7・16は熊野Ⅰ期と見ても良い。他は熊野Ⅱ期が相当であろう。住居跡の時期は熊野Ⅰ期に構築され、Ⅱ期には廃絶されたものと考えておきたい。

D区第13号住居跡（第514図）

D区第13号住居跡は33-18グリッドに位置する。重複する第10・12号住居跡、第10号掘立柱建物跡、第1号溝跡に切られていた。

平面形態は方形で、規模は長軸長4.65m、短軸長4.38m、深さ0.30mである。主軸方位はN-112°-Eを指す。

床面は平坦で全体に堅く締まっていた。重複する第10号住居跡との段差はほとんどなく床面が続いている。北壁際の第2号土壌周囲には灰層が薄く堆積していた。埋土は凍結のために十分な観察ができなかったが、第1層にはロームブロックと焼土が、第4層にはローム粒子が多量に含まれていた。埋め戻された可能性が高いものとする。

カマドは東壁に設けられていた。燃焼部の主体は壁内にある。埋土は第2～5層が天井部崩落土、第6・7層が灰層に相当しよう。袖は黄灰色粘土を積み上げて構築されていた。

ピットは7本検出された。Pit 3～6が支柱穴と考えられる。Pit 7は住居を切っていた。土壌は3基検出された。

第1号土壌は住居中央部にある。深さ5cm前後と浅く底面は硬化しており、床面の陥没と思われる。第2号土壌は北壁際にあり、内部に焼土粒子が多量に詰まっていた。周囲の床面には灰層が薄く堆積しており、カマドの痕跡と考えることもできる。第3

第188表 D区第13号住居跡出土遺物観察表（第514図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(9.7)	2.7		B G	A	橙褐色	30%	覆土
2	土師環	(11.1)	3.2		A B	A	茶色	20%	Pit 4
3	土師環	(11.0)	3.5		A B	A	橙褐色	35%	確認面+覆土
4	土師環	(11.3)	4.0		A B	B	橙褐色	45%	確認面+No12-15。覆土上層+下層。口縁部歪みあり
5	土師環	11.4	4.0		A B	A	橙褐色	70%	No7-13。覆土上層+下層
6	土師環	(11.1)	3.1		A B	A	橙褐色	30%	覆土
7	土師環	(11.7)	2.9		A B	A	橙褐色	30%	覆土+カマド
8	土師環	(13.8)	3.2		B	B	橙褐色	20%	覆土
9	土師甕	(19.6)	6.6		A B	A	褐色	30%	SK02+No28。床面
10	土師甕	21.6	6.8		A B	A	褐色	60%	カマド+No31(覆土下層)
11	土師小型壺	12.0	9.3	7.7	A B	B	暗褐色	70%	No8。床面。胴部外面保付着
12	土師小型壺	9.0	(9.5)		A B	A	茶褐色	90%	No11。床面
13	鉄製穂摘み具	No32。ほぼ床面。残長8.3cm。刃部中央は磨耗している							

号土壌は北西コーナー付近にあり、埋土にはロームブロックが多量に含まれており、上面は貼床されていた。床下土壌または掘り方の一部と考えられる。壁溝は西壁部中心に巡っていた。

出土遺物は少ない。土師器環・甕・小型壺、鉄製穂摘み具がある(第514図)。1・3・4・7・8は北武蔵型環。口縁部の内傾は弱い。2・6は模倣環である。5は有段口縁環で、段は退化している。9・10は土師器甕。胴部器壁の厚い長胴甕となろう。11・12は小型壺。13は鉄製穂摘み具と考えられる。両端に小孔が開く。刃部は中央が磨耗している。11・12の小型壺と13の鉄製穂摘み具は床面出土。

須恵器は11片出土し、坏が4点(末野)、蓋1点(末野)、壺瓶類3点(末野・南比企1)、甕3点(末野)である。

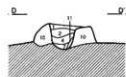
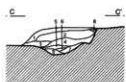
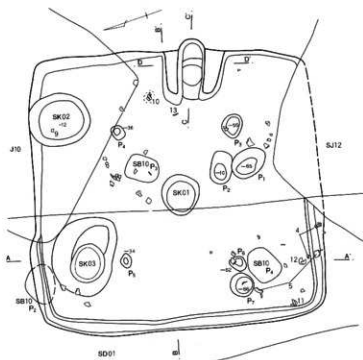
出土した土師器環類は小片が多いが、熊野I期と考えられる。重複する第10号住居跡もほぼ同一段階である。

D区第14号住居跡（第515図）

D区第14号住居跡は32-18・19グリッドに位置する。調査区北端にあり、遺構の大半は調査区外に延びている。第11・12号掘立柱建物跡と重複し、本住居跡の方が切られていた。

平面形態は方形系と推定され、残存規模は長軸長5.58m、短軸長1.92m、深さ0.35mである。主軸方位はN-83°-Eを指す。

第514図 D区第13号住居跡・出土遺物



SJ13

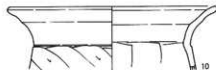
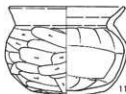
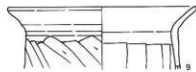
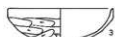
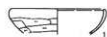
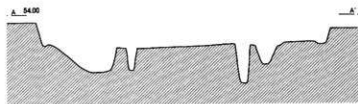
- 1 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子
焼土粒子多量
- 2 黒褐色土 ロームブロック少量
ローム粒子・焼土粒子多量
- 3 暗褐色土 ローム粒子少量
- 4 黒褐色土 ローム粒子多量
- 5 黒褐色土 ローム粒子多量。焼土粒混入
- 6 黒褐色土 焼土・灰少量 (SK01)

カマド

(SJ13)

- 1 暗褐色土 ロームブロック・炭化物多量
- 2 明褐色土 黄灰色粘土主体。
ローム粒子・焼土粒子少量
- 3 明褐色土 黄灰色粘土主体。ローム粒子
やや多量。焼土粒子少量
- 4 褐色土 焼土主体。焼土ブロック多量
- 5 褐色土 焼土多量
- 6 焼土 灰混入
- 7 黑色土 灰層
- 8 黄褐色土 ローム質土
- 9 黑色土 ロームブロック多量 (掘方)
- 10 明褐色土 黄灰色粘土主体
- 11 明褐色土 焼土混入

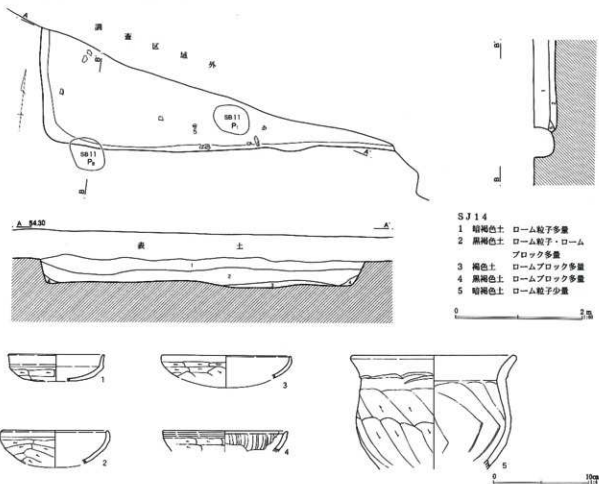
0 3m



13
(1/3)

0 10cm
0 5cm

第515図 D区第14号住居跡・出土遺物



第189表 D区第14号住居跡出土遺物観察表 (第515図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(10.0)	2.8		AB	A	褐色	10%	覆土
2	土師環	(11.0)	3.5		AB	A	淡褐色	15%	覆土
3	土師環	(13.6)	2.4		AB	A	褐色	15%	覆土
4	土師暗文環	(13.0)	2.2		AB	A	明褐色	20%	覆土。内面放射暗文
5	土師小型甕	(17.0)	12.0		ABG	A	褐色	20%	No5(床面)+覆土

床面は細かい凹凸があり、ロームブロックが浮き出していた。埋土にはローム粒子とロームブロックが多量に含まれており、人為的に埋め戻された可能性がある。

カマド、ピット、壁溝等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は非常に少なく、土師器環・暗文環・小型甕があるが、小片がほとんどである(第515図)。1は小振りの模倣環、2・3は北武蔵型環である。口縁部は内彎する。4は暗文環で、内面に放射暗文が施文

される。5は小型甕である。

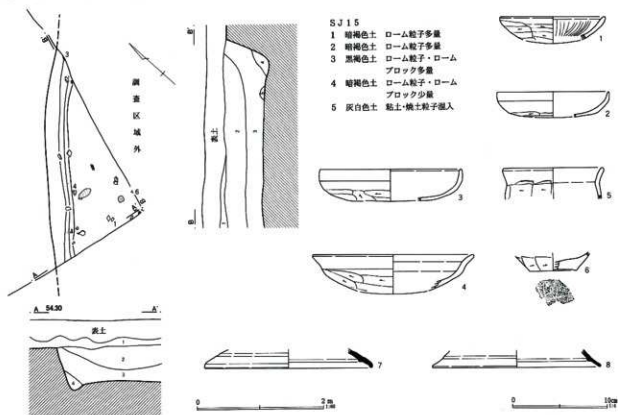
須恵器は4片出土し、環が1点(末野)、瓶類が2点(末野1・東海産1)、蓋が1点(末野)である。住居跡の時期は不明確であるが、出土遺物から熊野I期と考えておきたい。

D区第15号住居跡 (第516図)

D区第15号住居跡は調査区南東端部の34-19グリッドに位置する。遺構の大半は調査区外にあり、詳細は不明である。

平面形態は方形系と推定され、残存規模は長軸長

第516図 D区第15号住居跡・出土遺物



第190表 D区第15号住居跡出土遺物観察表 (第516図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師暗文環	(11.0)	2.4		AB	A	暗褐色	15%	No.16. 覆土下層。内面放射暗文。左回り
2	土師環	(11.8)	2.6		B	A	暗褐色	20%	覆土
3	土師環	(15.0)	3.3		AB	A	褐色	15%	No.1. 覆土上層
4	土師皿	(16.9)	3.8		AB	A	暗褐色	15%	No.8. 覆土上層
5	土師小型壺	(10.4)	3.3		AB	A	淡褐色	25%	覆土
6	土師甕		1.9	(5.0)	AB	A	暗褐色	30%	No.13. 覆土下層。底部木葉痕
7	須恵蓋	(17.6)	2.0		AB片	A	灰色	10%	覆土。末野産
8	須恵蓋	(17.6)	1.8		B	B	灰色	10%	覆土。末野産

3.45m、短軸長1.14m、深さ0.60mである。主軸方位はN-43°-Eを指す。

床面は平坦で堅く踏み固められていた。埋土はロームブロックが多量に含まれ、埋め戻された可能性が高い。

カマドは検出されなかった。壁溝は壁際に巡っていた。

出土遺物は少なく、土師器、須恵器の破片と礫が覆土中から出土している。器種としては土師器環・皿・暗文環・甕・小型壺、須恵器蓋がある(第516図)。

1は暗文環。内面に放射暗文が施文される。2・3は北武蔵型環。口縁部は直立しやや扁平化している。4は皿で口縁部は大きく外反する。5は小型壺または鉢。6は甕底部で、底面に木葉痕が残る。7・8は須恵器蓋。口径は不安定であるが、大型品と思われる。内面にかえりをもつ。

須恵器は24片出土し、環が9点、蓋が7点、瓶類が3点、甕が5点である。長頸瓶1点が湖西産である他は末野産と思われる。

住居跡の時期は熊野Ⅱ期と考えられる。

D区第16号住居跡 (第517~519図)

D区第16号住居跡は33-18-19グリッドに位置する。第17号住居跡と重複するが、両住居共にほぼ同時期の遺物が多量に出土しており、新旧関係を見極めるのは難しかった。平面観察から本住居跡の方が新しいものと判断した。断面は凍結のために十分な観察ができなかった。

平面形態はやや不整な方形で、規模は長軸長3.48m、短軸長3.05m、深さ0.27mである。主軸方位はN-113°-Wを指す。

床面は平坦で堅く踏み固められていた。埋土は少量のロームブロックと多量の焼土粒子を含む褐色土が基調となる。おそらく多量の遺物と共に投棄されたものと推定される。

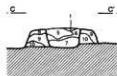
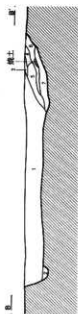
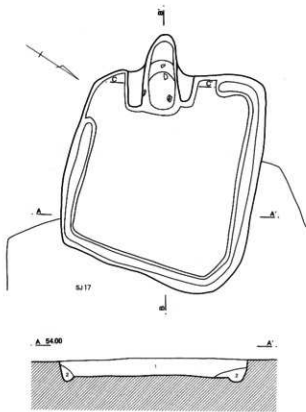
カマドは南西壁に設けられていた。燃焼部は壁を切り込んでおり、先端部は緩やかに立ち上がる。埋土は第3~6層が天井部崩落土、第7層が灰層である。袖は灰色粘土混じりの暗灰色土を主体に構築さ第517図 D区第16号住居跡

れていた。

ピットは検出されなかった。壁溝はカマドの周囲を除き巡っていた。

出土遺物は極めて多く、確認面から床面まで満遍なく分布していた。器種としては土師器環・暗文環・皿・甕・壺・甌・脚付盤、須恵器環・蓋、鉄製品と編物石?がある(第520図)。1~3・6・10は土師器模倣環である。10は口径が大きく口縁部下の稜もしっかりしており、最も古い要素を残す。4・5・7は暗文環系の器形と胎上であるが、内面の暗文は施文されない。9・11は内屈・内壇口縁の北武蔵型環である。12・13は暗文環。内面に放射暗文が施文される。14・15はおそらく暗文皿と思われるが、内面が風化しており暗文の有無は不明。16・17は皿である。

18は坏H蓋。口縁部外面に沈線が巡る。湖西産である。19・20は内面にかえりをもつ蓋。19は坏G蓋。20は一回り大きい口径12cm前後の坏に被さるものである。21~23は坏G。21は体部下位から底部にかけ



SJ16

- | | |
|---------|---------------------------|
| 1 褐色土 | ロームブロックまばらに混入
焼土粒子やや多量 |
| 2 明褐色土 | ローム粒子やや多量 |
| 3 褐色土 | 焼土粒子多量 |
| 4 褐色土 | 粘土粒子・焼土粒子多量 |
| 5 褐色土 | 粘土粒子・焼土粒子・炭化物
粒子多量 |
| 6 灰白色粘土 | 焼土ブロック混入 |
| 7 黒色土 | 灰層。灰・焼土混入 |
| 8 暗褐色土 | ローム粒子混入 |
| 9 暗灰色土 | ローム粒子・灰色粘土混入 |
| 10 暗灰色土 | ローム粒子・灰色粘土・ローム
ブロック混入 |

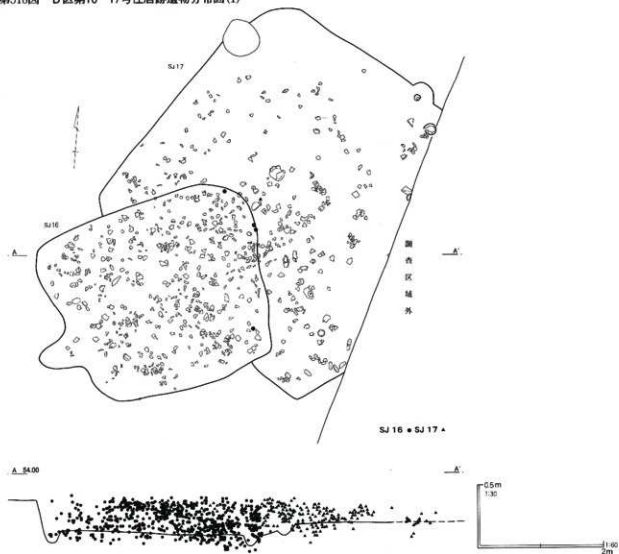
0 2m

て手持ちヘラケズリ調整される。22は坏としたが、坏H蓋となる可能性もある。湖西産である。23は外面が剥落し、調整は不明瞭。深身の坏Gとなろう。24は大型坏である。25は土師器の脚付盤か。内面はナデ、外面は手持ちヘラケズリ。29・30は鉄製刀子。29は柄部片で、鏝と木質が残る。30は片関である。

須恵器は38片出土し、坏が16点(末野15・湖西1)、蓋8点(末野6・湖西1・不明1)、盤1点(末野)、甕13点(末野)である。

住居跡の時期は出土遺物から熊野I期と考えられる。重複する第17号住居跡に比して古い様相をもつ土器を含んでおり、明確な時期差を求めるのは難しい。

第518図 D区第16・17号住居跡遺物分布図(1)



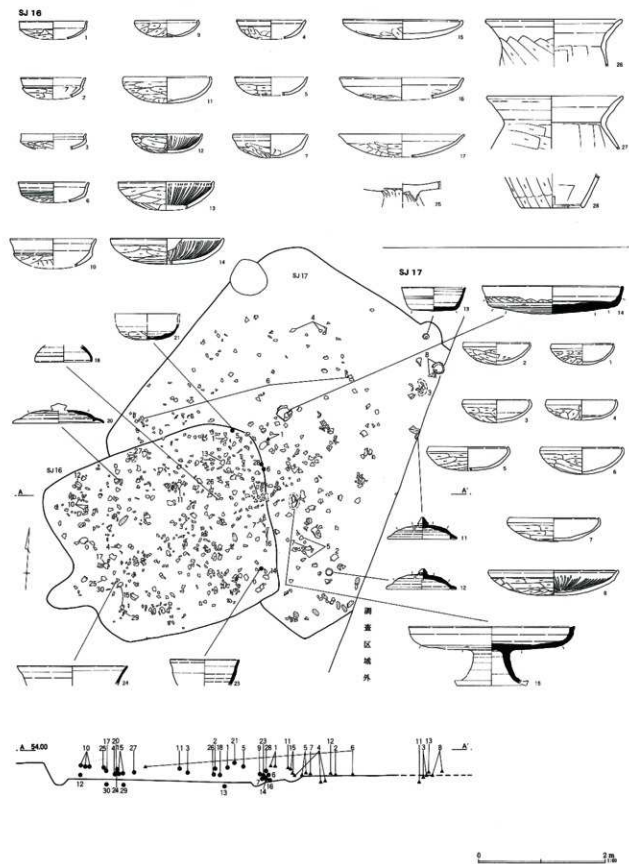
D区第17号住居跡(第521図)

D区第17号住居跡は調査区東端の33-19グリッドに位置し、東壁部は調査区外に延びる。第16号住居跡と重複する。調査段階から新旧関係は明確に把握できず、埋土の色調変化で第16号住居の方が新しいと判断した。断面は凍結していたため十分な観察ができなかった。また、第11号掘立柱建物跡とも重複し、掘立柱建物跡柱穴に本住居跡が切られていた。

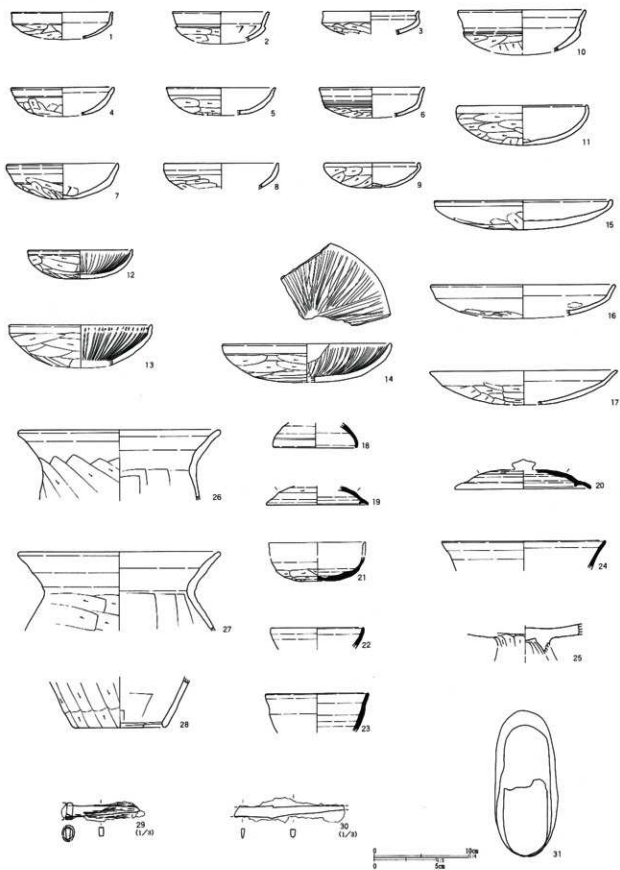
床面精査段階で床面下に入れ子状に遺構が存在することが判明した。壁溝と床面が検出され、拡張前の住居跡と考えられる。内側の住居跡を第17A号住居跡、拡張後の住居跡を第17B号住居跡とする。

第17A号住居跡は平面形態は方形系と推定され、

第519图 D区第16·17号住居跡遺物分布图(2)



第520图 D区第16号住居跡出土遺物



第191表 D区第16号住居跡出土遺物観察表(第520図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(10.6)	2.8		A	B	褐色	40%	No60. 覆土上層
2	土師環	(10.0)	3.1		B D G	A	褐色	15%	No82. 覆土上層。外面黒斑あり
3	土師環	(10.2)	2.4		A B	A	淡橙褐色	20%	No68. 覆土中層
4	土師環	(10.6)	2.9		B G	B	橙褐色	15%	No553. 覆土下層
5	土師環	(11.4)	2.9		A B D	B	橙褐色	20%	No46. 覆土上層
6	土師環	(11.0)	3.1		G	A	橙褐色	15%	No455. 覆土覆土中層
7	土師環	(11.6)	3.7		G	A	褐色	25%	No154. 下層。外面に黒斑あり
8	土師環	(12.0)	2.7		B G	A	橙褐色	20%	覆土
9	土師環	(10.0)	2.6		B	B	橙褐色	30%	No738. 覆土中層
10	土師環	13.4	4.3		A B	B	褐色	70%	No393-394-396. 覆土上層
11	土師環	13.7	4.2		A B	B	茶褐色	75%	No652 覆土上層
12	土師暗文環	(11.0)	3.0		A B	B	橙褐色	45%	No399. 覆土中層。内面放射暗文
13	土師暗文環	(14.8)	4.3		A B	B	橙褐色	20%	No920. 床面。内面放射暗文
14	土師暗文皿	(19.6)	4.0		A B	B	橙褐色	20%	No185. 覆土下層。内面放射暗文
15	土師皿	(18.8)	3.1		A B D	D	褐色	30%	No900-897(カマド内)。内面器表面荒れている
16	土師皿	(19.4)	3.2		A B D G	A	褐色	20%	No156. 覆土下層
17	土師皿	19.7	3.5		A B	A	橙褐色	25%	No904(カマド内)
18	須恵蓋	(8.7)	2.6		B C F	A	青灰色	15%	No128. 覆土中層。湖西産
19	須恵蓋	(10.6)	1.9		片	B	灰白色	5%	覆土。未野産。かえり径9.0cm
20	須恵蓋	(14.1)	2.0		B D G	D	灰褐色	20%	No406. 覆土中層。未野産。かえり径11.2cm
21	須恵環		2.5	3.2	B 片	A	青灰色	20%	No58. 覆土上層。未野産。底部手持ちヘラケズリ
22	須恵環	(9.7)	2.2		B	A	灰色	10%	覆土。湖西産
23	須恵環	(10.8)	4.1		B D G	B	灰褐色	10%	No198. 覆土中層。未野産。外表面剥落部復元図化
24	須恵環	(17.2)	3.1		B D F 片	A	灰色	25%	No901(カマド内)。覆土。未野産
25	土師脚付盤か		2.8		A B F	D	橙褐色		No903(カマド内)
26	土師甕	(21.0)	7.4		A B D	B	明褐色	25%	No126. 覆土中層
27	土師壺	(21.0)	8.3		A B D F	D	橙褐色	15%	No322. 覆土中層
28	土師甕		5.4	(9.8)	A B	A	橙褐色	10%	No94. 覆土上層
29	刀子	No911(カマド内)。残長5.8cm。柄部片。口金(はばき)一部付着。一部遊離。木質残る							
30	刀子	カマドNo4。残長8.7cm							

規模は長軸長5.18m、短軸長4.80m、深さ0.25mである。主軸方位はN-37°-Eを指す。

床面は貼床されやや凹凸がある。埋土はロームブロックの混入が目立つ。

カマドは北東壁に設けられていた。燃焼部は壁を僅かに切り込んで掘られていた。埋土は第1・2層が天井部崩落土。第6層は掘り方である。第3層中に灰が多く含まれていたが、下面に焼土ブロック層があり灰層として良いか不明確である。袖は灰色粘土主体に構築されていた。

ピットは6本検出された。Pit 1~4は主柱穴である。Pit 5・6は住居を切っており、中世の所産と考えられる。壁溝は南西壁に一部巡っていた。

第17B号住居跡はほぼ方形の平面形態と推定される。規模は長軸長3.78m、短軸長3.30m、17A号住

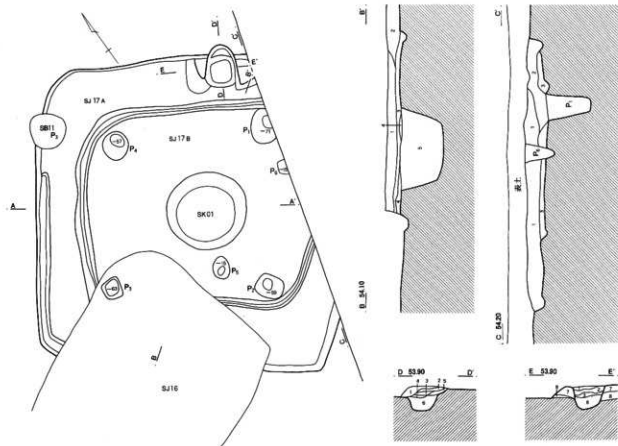
居跡床面からの深さ0.05~0.10mである。

床面はやや凹凸があり、堅く踏み固められていた。埋土はローム混じりの明褐色土で、上面は貼床されていた。

住居中央部には土壌が1基掘り込まれていた。上面は貼床され、いわゆる床下土壌と考えられる。

出土遺物は多い。北東壁とカマド周辺が比較的少ない他は多量の破片が出土した。器種としては土師器環・暗文皿、須恵器環・蓋・盤・脚付盤と編物石がある(第522図)。1~7は内屈口縁の北武蔵型環である。小振りのものとやや大振りのものがある。8は暗文皿で、内面に放射暗文が施文されている。9~12は坏G蓋である。いずれも内面にかえりをもち、11・12は宝珠つまみが付く。13は坏G。底部は平底風で、ヘラ切り痕を残す。14は無台盤である。底部は分厚

第521図 D区第17号住居跡



SJ17

- | | | |
|---|------|-------------|
| 1 | 暗褐色土 | ロームブロックやや多量 |
| 2 | 褐色土 | 灰色粘土やや多量 |
| 3 | 明褐色土 | ロームブロックやや多量 |
| 4 | 暗褐色土 | ローム粘土混入 |
| 5 | 明褐色土 | 黒色土少量 |

カマド (SJ17)

- | | | |
|---|-------|------------------|
| 1 | 暗褐色土 | 焼土粒子・灰白色粘土ブロック多量 |
| 2 | 暗赤褐色土 | 焼土多量 |
| 3 | 暗褐色土 | 灰・炭多量 |
| 4 | 明赤褐色土 | 赤色硬化したロームブロックで構成 |
| 5 | 暗褐色土 | ローム粒子・ロームブロック多量 |
| 6 | 褐色土 | ロームブロック多量 |
| 7 | 暗褐色土 | ローム粘土・灰色粘土混入 |
| 8 | 暗褐色土 | ローム粒子・焼土・灰色粘土混入 |

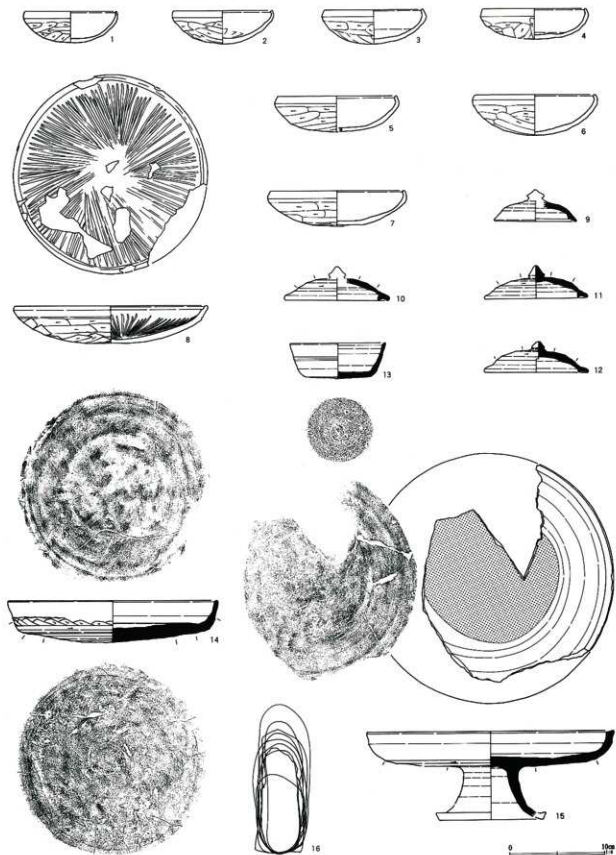
く、接合痕を明瞭に残す。底部は手持ちヘラケズリと回転ヘラケズリを併用している。内面は指ナデで、ロクロ目を雑に消している。15は脚付盤である。口唇部は面をもつ。内面中心付近は磨滅し同心円文当て具痕が僅かに残る。底面は回転ヘラケズリ調整。16は編物石の集成である。

土師器環は北武蔵型環が主体であるが、小片ではあるが、模倣環、有段口縁環、暗文環も存在する。

また、甕、壺、瓶、台付甕や小型甕も組成に加わっており、器種構成からは第16号住居跡とほぼ同様である。

須恵器は19片出土し、坏が1点、碗が1点、高台坏1点、蓋4点、脚付盤6点、盤2点、甕4点、いずれも末野産である。第16号住居跡に存在する中・大型の坏(蓋)は検出されていない。住居跡の時期は熊野Ⅰ期と考えられる。

第522图 D区第17号住居跡出土遺物



第192表 D区第17号住居跡出土遺物観察表(第522図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼色	色調	残存	備考
1	土師環	9.7	3.3		A B片	B	橙褐色	75%	SJ16(N636-39)。覆土上層
2	土師環	10.4	3.5		A B D	A	橙褐色	85%	SJ17A(N6145)。覆土下層。内面磨減
3	土師環	10.4	3.6		A B D	A	茶褐色	85%	SJ17A カマFNo5-8, Pit2
4	土師環	10.8	3.2		A B	A	明褐色	80%	SJ17A(N671-72-74)。覆土中層
5	土師環	(12.4)	3.7		A B F	D	橙褐色	25%	SJ17A(N6158-162)。覆土中層
6	土師環	(12.5)	4.2		A B	B	橙褐色	50%	SJ17A(N682-14)。覆土中層+床面
7	土師環	(14.0)	3.6		A F	D	茶褐色	15%	SJ17(N6159)。覆土中層
8	土師暗文皿	20.3	3.9		A B	B	褐色	85%	SJ17A カマD右軸内No3-4。内面放射暗文(下→上)
9	須恵蓋	(8.7)	2.2		B	B	黄灰色	25%	SJ17。未野産か。天井部外面ロクロナデ(ケズリ不明)
10	須恵蓋	(10.8)	2.4		B C片	B	明灰色	20%	SJ17A Pit4。未野産。かえり径8.8cm
11	須恵蓋	10.7	3.4		C F片	A	明灰色	55%	SJ17B(N610)。床面。未野産。かえり径8.9cm
12	須恵蓋	10.7	3.2		C片	A	青灰色	100%	SJ17A(N64)。覆土中層。未野産。かえり径8.6-9.1cm
13	須恵環	9.9	3.7	6.8	B片	A	淡青灰色	95%	SJ17A カマFNo1。覆土。未野産。体形浅い沈線2条
14	須恵盤	22.1	4.3		C片	A	明灰色	70%	SJ17A(N61)。上層。未野産
15	須恵脚付盤	25.0	9.0		C片	B	灰白色	50%	SJ17A(N62+SJ17B(N616)。覆土下層+床面

D区第18号住居跡(第523図)

D区第18号住居跡は調査区南端の34-17グリッドに位置する。第19号住居跡が近接するが直接重複はしない。

平面形態は方形系と推定され、残存規模は長軸長1.20m、短軸長1.02m、深さ0.42mである。南西壁には張出状の施設が見られた。断面観察からは住居埋土と同様で切り合い関係は認められなかった。主軸方位はN-18°-Wを指す。

床面は凹凸があるが堅く踏み固められていた。埋土はロームブロックが多量に混じる褐色土を基調としており、第一次堆積後人為的に埋め戻された可能性が高い。

カマドやPit等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は鉄製品がある(第523図1・2)。1は鉄製刀子。完形品で床面出土。2は角棒状鉄器。他には土師器環・暗文環・甕胴部片、須恵器環・蓋の細片が出土したのみである。

時期は不明確であるが、出土遺物から見る限り熊野Ⅱ期頃と推定される。

D区第19号住居跡(第523図)

D区第19号住居跡は34-17グリッドに位置する。重複する第20号住居跡を切っていた。

平面形態は方形系と推定されるが、調査区外に延びるため詳細は不明。残存規模は長軸長3.70m、短

軸長1.86m、深さ0.32mである。主軸方位はN-82°-Eを指す。

床面は第20号住居跡を埋めて構築されるためやや沈下していたが、全体に堅く踏み固められていた。埋土はローム粒子と焼土の混入が目立った。

カマドは検出されなかった。壁溝は巡っていた。

出土遺物は土師器環、須恵器環・蓋、土器片紡錘車がある(第523図3-9)。土師器環(5)は体部下端にヘラケズリ調整が加わる。おそらく平底となろう。6-8は須恵器環。底部は回転糸切り後無調整。6は口縁部が外反している。9は須恵器高台碗?底部を再加工して紡錘車にしたものである。半分を欠く。住居跡の時期は熊野Ⅱ期頃と推定される。

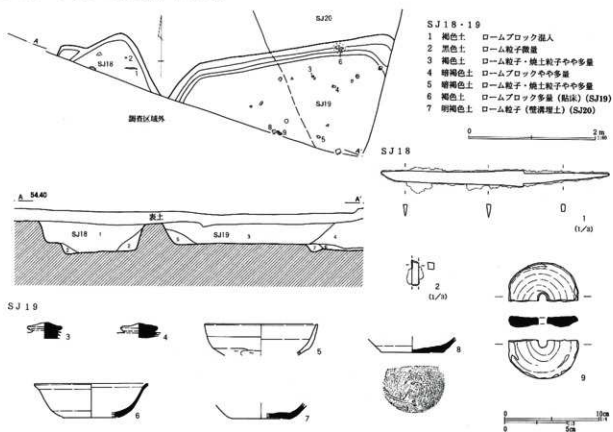
D区第20号住居跡(第524図)

D区第20号住居跡は調査区南端の34-17グリッドに位置する。第19号住居跡に切られているが、本住居跡の方が深いため、床面は遺存する。

平面形態は方形系と推定されるが、調査区外に延びるため詳細は不明である。残存規模は長軸長3.72m、短軸長3.06m、深さ0.48mである。主軸方位はN-70°-Eを指す。

床面はゴツゴツした凹凸が顕著であるが、全体に堅く踏み固められていた。埋土は第1・2層にロームブロックが多量に含まれていた。住居跡絶後、一定期間を置いた後に埋め戻された可能性がある。

第523図 D区第18・19号住居跡・出土遺物



第193表 D区第18・19号住居跡出土遺物観察表（第523図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	刀子	SJ18(Na2)。床面。長さ18.2cm。完存品							
2	不明鉄製品	SJ18(Na1)。床面。残長2.0cm。縦約0.5cm。横0.5cm。棒状							
3	須恵蓋		1.7		ABG	A	青灰色	90%	SJ19(Na8)。覆土中層。末野産
4	須恵蓋		1.5		片	B	灰色	90%	SJ19(Na5)。床面。末野産
5	土師環	(11.8)	3.3		ABD	B	褐色	15%	SJ19(Na13)。覆土中層
6	須恵環	(11.9)	3.6	(6.0)	A片	B	灰色	40%	SJ19(Na6)。ぼぼ床面
7	須恵環		1.7	(6.0)	A片	A	灰色	20%	覆土。末野産
8	須恵環		1.7	6.5	片	A	灰色	50%	SJ19(Na16)。覆土中層。末野産
9	紡錘車	SJ19(Na15)。覆土中層。高さ1.2cm。重さ36.6g。胎土BCG。焼成B。灰茶色。残存55%							

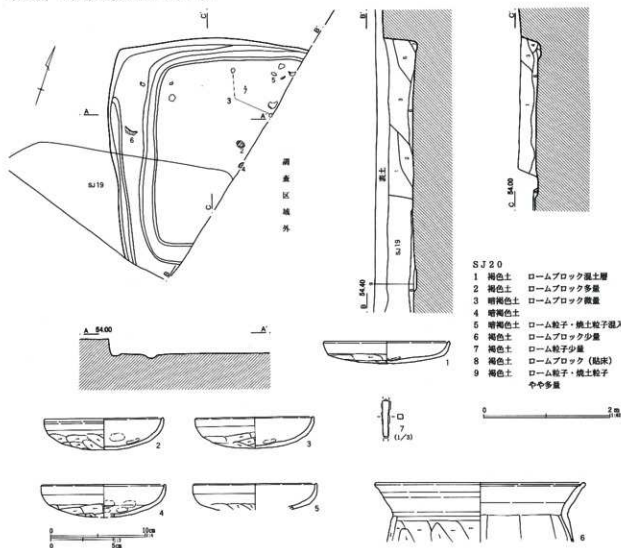
カマド・ピットは検出されなかった。壁溝は二重に巡る。内側の壁溝は上面に貼床されており、一度拡張したことが判明した。外側の壁溝は西壁部に検出された。

出土遺物は少なく、土師器・環・皿・甕、鉄製品がある(第524図)。1は土師器皿。口縁部は短く立ち上がり、底部はヘラケズリ調整。内面に指頭痕が付く。2～4は丸底で、口縁部が直立する北武蔵型環である。口縁直下に未調整部を残す。2は床面出土。5は口縁の下方に明確な腰をもつ。平底風となろうか。

2～4よりも新しい様相である。6は土師器甕で、口縁内面が窪む。胴部はヨコケズリとタテケズリが見える。7は不明鉄製品。角棒状である。1・5は混入の疑いがある。

須恵器は15片出土し、坏が5点(末野4・南比企? 1)、蓋5点、壺瓶類2点(末野)、甕3点(末野)である。図示しなかったが、蓋には内面にかえりをもつ大型蓋の小片が含まれる。住居跡の時期は2～4の坏と甕(6)を基準に熊野Ⅱ期と考えておきたい。

第524図 D区第20号住居跡・出土遺物



- SJ 20
- 1 褐色土 ロームブロック覆土層
 - 2 褐色土 ロームブロック多量
 - 3 明褐色土 ロームブロック少量
 - 4 暗褐色土
 - 5 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子混入
 - 6 褐色土 ロームブロック少量
 - 7 褐色土 ローム粒子少量
 - 8 褐色土 ロームブロック(貼床)
 - 9 褐色土 ローム粒子・焼土粒子やや多量

第194表 D区第20号住居跡出土遺物観察表(第524図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師皿	(13.2)	2.3		ABG	B	褐色	25%	覆土
2	土師環	(12.4)	3.3		AB	B	褐色	50%	No15. 床面
3	土師環	(12.4)	3.3		ABG	B	褐色	25%	No5-14. 覆土上層
4	土師環	(13.0)	3.4		AB	B	明褐色	30%	No4. 覆土上層
5	土師環	(12.9)	2.7		AB	B	褐色	15%	No11. 覆土上層
6	土師罎	(22.0)	6.2		AB	B	黄褐色	30%	No1. 覆土下層
7	鉄製品	No13. 上層。残長2.9cm。幅0.4cm。横0.5cm。棒状							

2. 掘立柱建物跡(古代)

D区第2号掘立柱建物跡(第525図)

D区第2号掘立柱建物跡は32・33-15グリッドに位置する。建物の南半は調査区外に延びるため、遺構の詳細は不明である。重複する第13号土壌に切られていた。

現状で3×2間の建物であるが、桁行は更に延び

る可能性がある。規模は桁行長5.40m、梁行長4.80mである。主軸方位はN-60°-Eを指す。

柱間は桁行1.80m、梁行2.40mに復元されるが、実際の柱痕位置はややずれ気味である。また、桁行のPit 2とPit 3の間に柱穴が1本存在する(Pit 7)。柱痕も認められ、掘立柱建物跡柱穴と見て良いもの

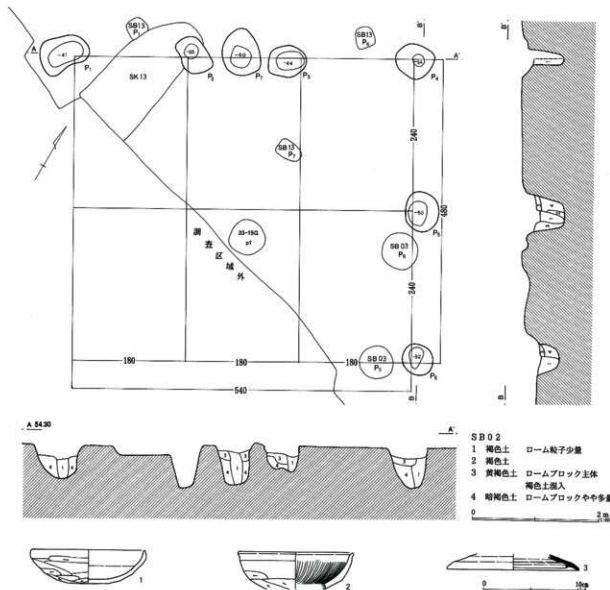
であるが、本建物に伴うか否かは不明である。柱筋は概ね通っている。

柱穴は円形または楕円形で、長径55cm～80cm前後、深さは32cm～65cmである。柱痕は全ての柱穴から検出された。掘り方埋土はローム混じりの土である。

出土遺物は少なく、土師器環・暗文環、須恵器蓋がある(第525図)。1は内屈口縁の北武藏型環。底部は

丸底である。2は暗文環。内面に放射暗文が施文される。やはり深身の丸底形態である。3は須恵器蓋で、内面にかえりが付く。シャープなつくりである。口径12cm前後の身とセットとなろう。

建物跡の時期は不明確であるが、出土遺物からみると熊野I期となろうか。



第195表 D区第2号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第525図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(12.0)	3.5		AB	A	橙褐色	20%	Pit7
2	土師暗文環	(12.0)	3.9		AB	A	橙褐色	20%	Pit4, 内面放射暗文(下→上)左回り
3	須恵蓋	(14.0)	1.7		BC片	A	灰色	10%	Pit5, 末野産

D区第3号掘立柱建物跡 (第526図)

D区第3号掘立柱建物跡は32・33-15・16グリッドに位置する。重複する第9号土壌に切られていた。第2・4・5・16号掘立柱建物跡とは柱穴同士の切り合いはなく、新旧関係は直接には不明である。

3×2間の側柱建物と考えられる。規模は桁行長5.25m、梁行長4.20mである。主軸方位はN-21°-Wを指す。

桁行の柱間は北から1.65m、1.80m、1.80mと等間に揃わない。梁行は2.10m等間となる。柱筋は概ね通っている。

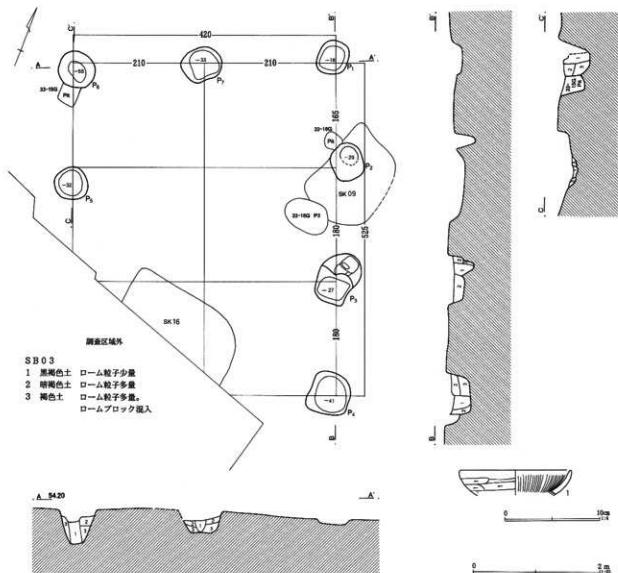
柱穴は円形または楕円形で長径55cm~90cm、深さは

10cm~44cmと浅いものが多い。柱痕または柱抜き取り痕はPit 3~7で確認された。掘り方埋土はローム粒子とロームブロック混じりの土が互層となるものが多い。

出土遺物はPit 6から土師器暗文環が検出された(第526図1)。1は土師器暗文環で器壁は厚く丸底器形となるであろう。推定口径11.6cm。胎土に白色粒子と角閃石を含む。焼成は良好で明褐色。約15%残存する。内面に放射暗文が施文される。

建物跡の時期は不明確である。出土遺物は熊野I~II期に納まる。

第526図 D区第3号掘立柱建物跡・出土遺物



D区第4号掘立柱建物跡 (第527図)

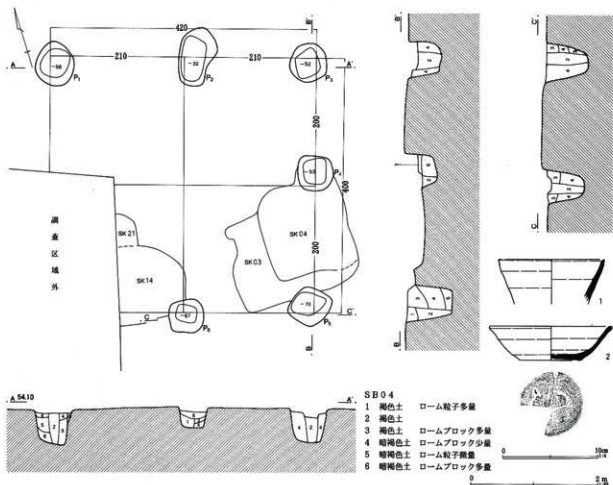
D区第4号掘立柱建物跡は33-16グリッドに位置する。重複する第4・14号土壌に切られていた。

2×2間の側柱建物である。規模は桁行長4.20m、梁行長4.00mである。主軸方位はN-106°-Eを指す。

柱間は桁行2.10m、梁行2.00m等間にはば揃う。柱筋は概ね通っている。

柱穴は不整形や楕円形で、長径50cm～90cm前後である。深さは50cm前後のものが多い。柱痕は全ての柱穴で確認されている。

出土遺物は須恵器長頸瓶と環がある(第527図)。1
第527図 D区第4号掘立柱建物跡・出土遺物



はPit 3から出土した須恵器長頸瓶。内面に自然軸が付く。産地不明。群馬産か。2は須恵器環である。Pit 1掘り方から出土した。底部回転糸切り後無調整。末野産である。

建物跡の時期は須恵器環の特徴から熊野Ⅵ期と考えられる。

D区第5号掘立柱建物跡 (第528図)

D区第5号掘立柱建物跡は33-15・16グリッドに位置する。重複する第4号掘立柱建物跡に切られていた。

調査区外に延びるため正確な規模は不明であるが、現状で2×2間の側柱建物である。規模は桁行長

第196表 D区第4号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第527図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵長頸瓶	(11.0)	4.7		B	A	暗灰色	15%	Pit 3. 産地不明
2	須恵環	(12.7)	3.6	6.5	BC片	C	淡褐色	35%	Pit 1. 末野産

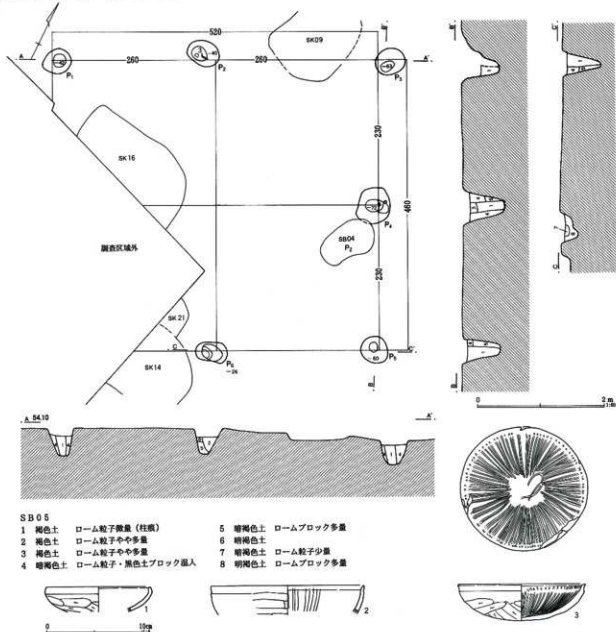
5.20m、梁行長4.60mである。主軸方位はN-53°
-Eを指す。

柱間は桁行2.60m、梁行2.30m等間となり特に桁
行の柱間隔が広い。柱筋はややずれ気味である。

柱穴は円形または楕円形で、長径40cm-50cm前後、
深さは26cm-65cmである。柱痕または柱抜き取り痕
第528図 D区第5号孤立柱建物跡・出土遺物

はPit6を除き検出された。

出土遺物は土師器環・暗文環がある(第528図)。1
は内屈口縁の北武藏型環である。底部は丸底となろ
う。2は大振りの暗文環である。内面に放射暗文が施
文される。3はほぼ完形の暗文環である。Pit2の柱
痕(柱抜き取り痕)に落ち込んだかのような横位の



第197表 D区第5号孤立柱建物跡出土遺物観察表(第528図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(10.8)	2.6		AB	A	茶褐色	15%	Pit1
2	土師暗文環	(16.0)	3.0		AB	A	暗褐色	10%	Pit4. 内面放射暗文
3	土師暗文環	13.4	3.8		AB	A	濃橙褐色	95%	Pit2内N2. 内面放射+螺旋暗文

状態で出土した。内面に放射暗文と、中央部に僅かに螺旋状の暗文が見える。

建物跡の時期は出土遺物から熊野Ⅰ期新段階～Ⅱ期古段階が中心となるものと考えておきたい。

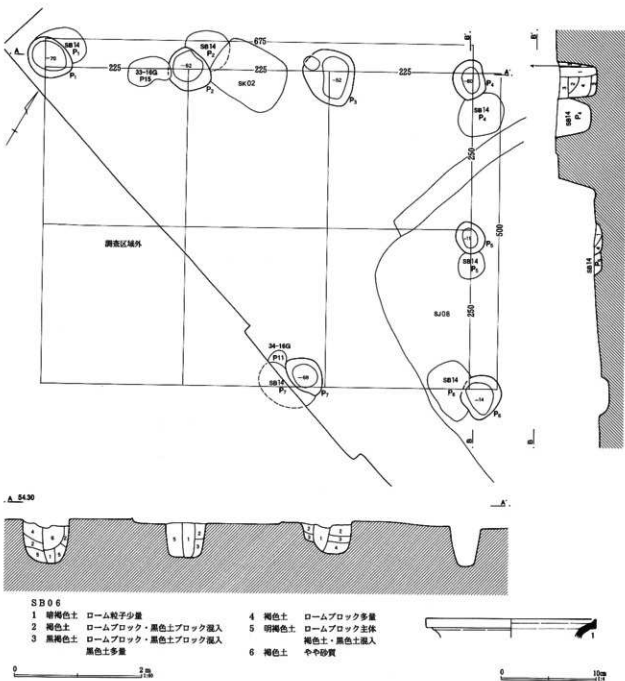
D区第6号掘立柱建物跡 (第529図)

D区第6号掘立柱建物跡は33・34・16・17グリッドに位置する。重複する第14号掘立柱建物跡を切り、第8号住居跡及び第2号土壇に切られていた。第14号掘立柱建物跡・出土遺物

号掘立柱建物跡は柱穴位置がほぼ同一地点に重なるため、第14号掘立柱建物跡から本建物跡に直接建て替えたものと考えられる。

調査区外に掛かるため正確な規模は不明であるが、現状で3×2間の側柱建物である。規模は桁行長6.75m、梁行長5.00mである。主軸方位はN-60°-Eを指す。

柱間は桁行2.25m、梁行2.50m等間に復元できる



が南側桁柱のPit 7はずれてしまう。柱筋は概ね通っている。

柱穴は円形または不整形で、長径60cm～90cm、深さは50cm～70cm前後と深い。柱痕は北側柱列のPit 1～4で確認された。掘り方土はロームブロックと黒色土の混土層で構成されていた。

出土遺物は非常に少なく、図化できたのはPit 6から出土した須恵器壺のみである(第529図1)。1は須恵器壺。推定口径17.8cm。胎土に白色粒子と片岩を含み焼成は良好。灰色に焼き上がり、約10%残存する。末野産である。Pit 6は大半を第8号住居跡に削平され、帰属は不明確とした方がよいであろう。

建物跡の時期は不明確であるが、第2・3・5号掘立柱建物跡と主軸方位が近く、熊野Ⅰ～Ⅱ期に遡る可能性がある。

D区第8号掘立柱建物跡(第530図)

D区第8号掘立柱建物跡は33・34-17グリッドに位置する。重複する第8号住居跡、第19号掘立柱建物跡に切られていた。また、建物内には第2号溝跡が主軸に沿うように掘り込まれているが、建物跡との直接的な関係は不明である。

3×2間の建物である。建物中軸線上にPit11とPit12が検出され、伴うとすれば総柱建物となる。但し、Pit12は柱間が若干ずれ気味である。規模は桁行長5.10m、梁行長4.20mである。主軸方位はN-56°-Wを指す。

柱間は桁行1.70m、梁行2.10m等間に揃う。柱筋は北東側柱列は揃うが、梁行の中間柱であるPit 5とPit10は棟持柱風に柱筋よりも外側にずれている。

柱穴は円形または楕円形で、長径50cm～80cm前後。深さは60cm～80cmと非常に深い。Pit11・12は25cm～50cmとやや浅く建物に伴うとすれば束柱となろう。柱痕Pit 1・3・10で明瞭に検出された。柱痕埋土にもロームブロックが若干混じっていた。掘り方土はロームブロックと粘土ブロックが多量に含まれていた。

出土遺物は土師器暗文杯と甕胴部片、須恵器杯が少量出土したのみである。須恵器杯は底部が手持ち

ヘラケズリ調整されていた。建物跡の時期は不明確であるが、熊野Ⅰ期以前となるのは間違いない。熊野Ⅰ期に遡る可能性もあろう。

D区第9号掘立柱建物跡(第531図)

D区第9号掘立柱建物跡は31・32-16・17グリッドに位置する。重複する第6号住居跡を切っていた。

調査区外に掛かるため正確な規模は不明であるが、現状で3×2間の側柱建物と考えられる。Pit 5・Pit 6間は溝が連結しており、いわゆる溝持ちの建物である。規模は桁行長7.20m、梁行長5.10mである。主軸方位はN-59°-Eを指す。

柱間は桁行2.40m、梁行2.55m等間に復元できる。柱筋は概ね通っている。

柱穴は方形または楕円形で、長径50cm～100cm前後、深さは25cm～60cmである。柱抜き取り痕はPit 3・6・7で検出された。

出土遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕があるが、いずれも細片で図化可能な遺物はない。土師器杯は内屈口縁の北武蔵型杯である。土師器甕は器壁が薄いものはなく、須恵器甕の内面には同心円文当て具痕が残されている。須恵器杯は8世紀代のもと思われる。

建物跡の時期は不明確であるが、出土遺物の様相から9世紀以前、おそらく熊野Ⅱ期～Ⅲ期を中心とした時期と思われる。

D区第10号掘立柱建物跡(第532図)

D区第10号掘立柱建物跡は33・17-18グリッドに位置する。重複する第9・13号住居跡を切っていた。

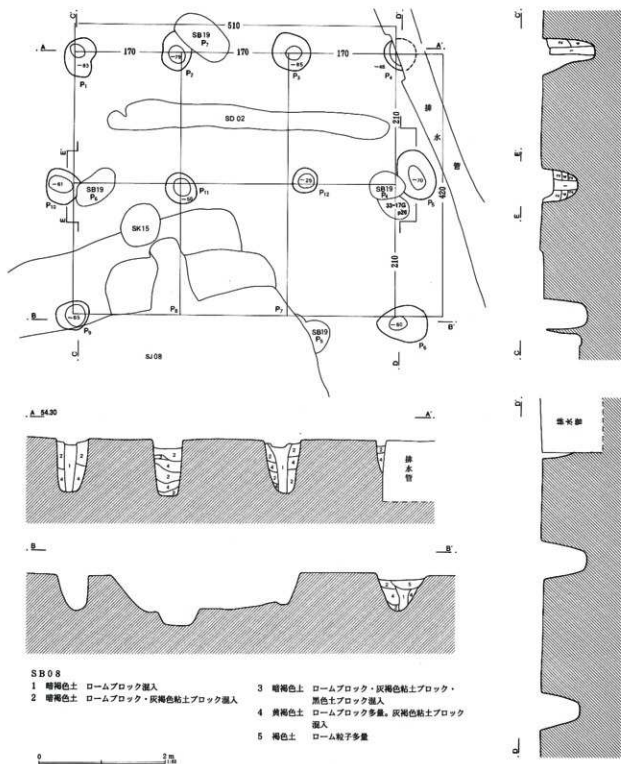
2×2間の倉庫状方形建物であるが、内部に柱穴はなく総柱構造は採らない。規模は一辺4.60mである。主軸方位はN-30°-Wを指す。

柱間は2.30m等間に揃い、柱筋も通っている。

柱穴は円形基調で、直径60cm前後のものが多い。深さは28cm～60cmである。柱痕または柱抜き取り痕と思われる痕跡は全ての柱穴で認められた。

出土遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・長頸瓶がある。いずれも小片で図化可能な遺物はない。須恵器杯は

第530図 D区第8号掘立柱建物跡



大型環になると思われるものがある。土師器環は内
 堀口縁の北武蔵型環、甕は器壁が厚いものである。

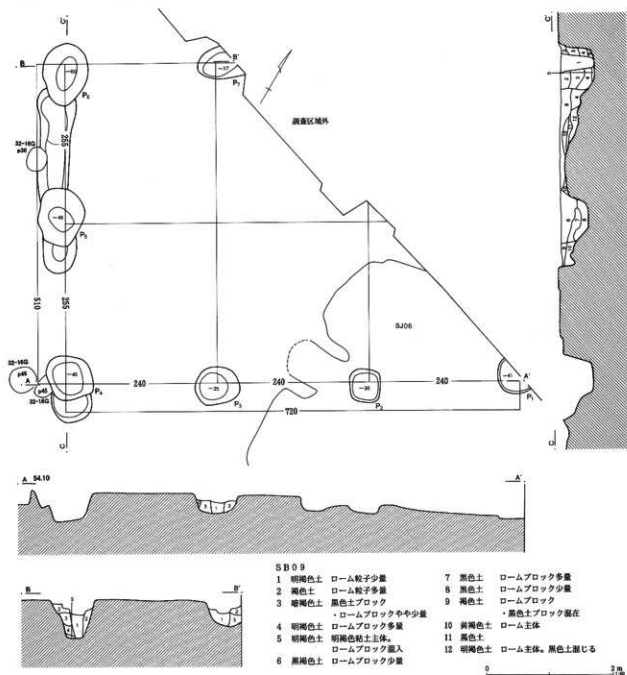
建物跡の時期は不明確であるが、重複住居との関
 係から熊野Ⅰ期までは遡らないであろう。熊野Ⅱ期

を中心とし、Ⅲ期頃までが下限となろうか。

D区第11号掘立柱建物跡 (第533図)

D区第11号掘立柱建物跡は32・33-18・19グリッド
 に位置する。重複する第14・17号住居跡を切って

第531図 D区第9号掘立柱建物跡



いた。

2×2間の総柱建物で、規模は桁行長4.20m、梁行長4.00mである。主軸方位はN-28°-Wを指す。

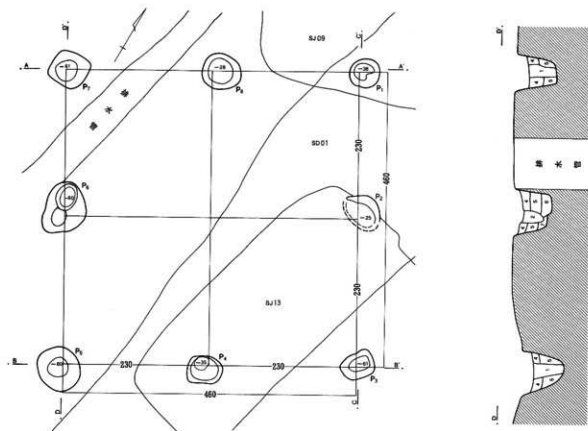
柱間は桁行1.90mと2.30m、梁行2.00mとなり、等間に揃わない。柱筋もきれいに通らない。

柱穴は円形で、直径40cm～70cmほどである。深さは30cm～64cmと揃っていない。柱痕はPit1・5～7、柱抜き取り痕はPit2～4で確認された。

出土遺物は土師器杯・甕・壺、須恵器蓋があるが、量的には少なく、須恵器蓋を図化した(第533図)。1は須恵器蓋で内面にかえりをもつ。推定口径14.6cm。胎土に白色粒子と片岩を含み焼成は普通。灰色を呈し約15%残存する。Pit4出土。末野産である。

建物跡の時期は不明確であるが、熊野Ⅱ期頃と考えておきたい。

第532図 D区第10号掘立柱建物跡

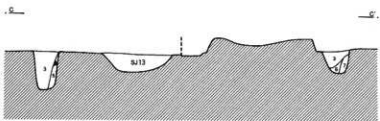
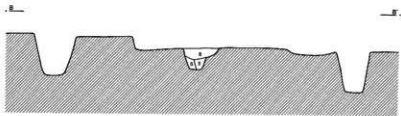


A 5410



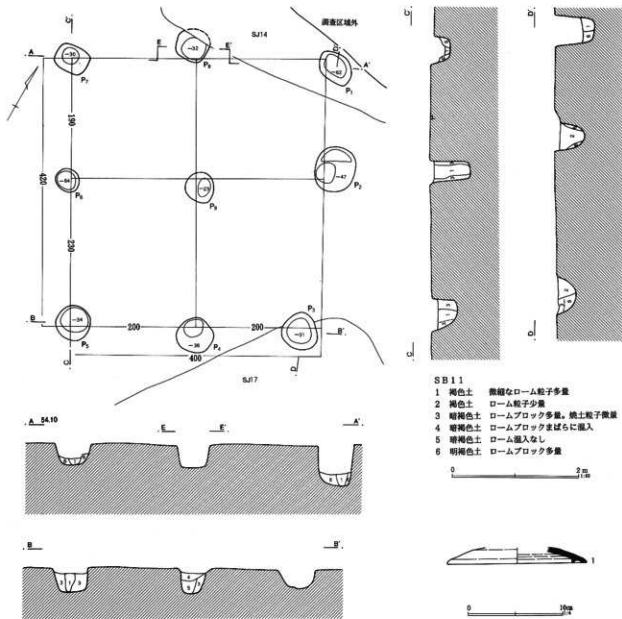
—A— SB 10

- 1 褐色土 灰色粘土ブロック・ローム粒子少量
- 2 褐色土 ローム粒子やや多量
- 3 灰褐色土 灰色粘土やや多量
- 4 褐色土 粘土ブロック・ロームブロックやや多量
- 5 明褐色土 ロームブロックやや多量
- 6 褐色土
- 7 明褐色土 ロームブロック多量
- 8 褐色土 粘土粒子・焼土粒子少量



0 2m

第533図 D区第11号掘立柱建物跡・出土遺物



D区第12号掘立柱建物跡 (第534図)

D区第12号掘立柱建物跡は32・33-18・19グリッドに位置する。調査区外に掛かるため遺構の全体像は不明である。重複する第19号土壌に切られていた。

3×1間の建物と捉えたが、梁行の中間柱が検出されず、建物として良いか疑問点もある。規模は桁行長4.20m、梁行長3.20mである。主軸方位はN-66°-Eを指す。

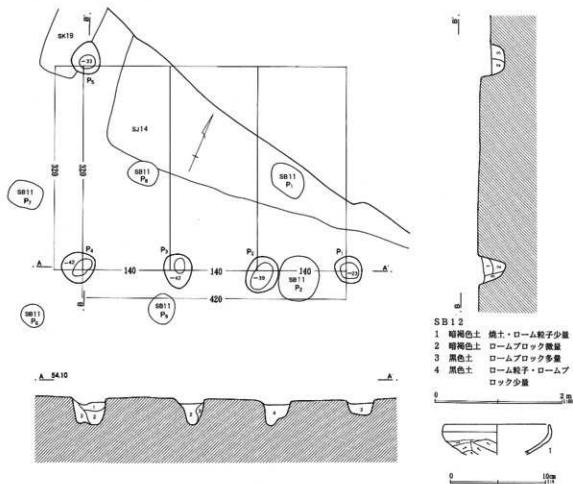
柱間は桁行1.40m等間に復元されかなり狭い。梁

行は3.20mである。柱筋は通っている。

柱穴は円形で直径40cm前後、深さは23cm~42cmと比較的浅い。柱抜き取り痕はPit 3~5で確認された。

出土遺物は少なく、土師器環が図化できたのみである(第534図1)。その他には土師器甕、内面同心円文当て具痕を残す須恵器甕の破片が出土した。1は内屈口縁の北武蔵型環。底部は丸底となろう。推定口径11.0cm。胎土に角閃石・白色粒子を含み、焼成は良好。橙褐色で約10%残存する。Pit 4出土。

第534図 D区第12号掘立柱建物跡・出土遺物



建物跡の時期は不明確であるが、遺物は熊野Ⅰ～Ⅱ期頃のものと思われる。

D区第14号掘立柱建物跡 (第535図)

D区第14号掘立柱建物跡は33・34-16・17グリッドに位置する。第8号住居跡、第2号土壌に切られていた。また、第6号掘立柱建物跡は本建物跡と柱穴がほぼ重なり、本建物跡から第6号掘立柱建物跡に直接建て替えられたものと考えられる。

調査区外に掛かるため、桁行はまだ延びる可能性はあるが、現状で3×2間の建物である。規模は桁行長6.90m、梁行長4.80mである。主軸方位はN-60°-Eを指す。

柱間は桁行2.30m、梁行2.40m等間に復元されるが、ややずれ気味である。Pit 3は第6号掘立柱建物跡Pit 3と同位置に重なる。柱筋は概ね通る。

柱穴は楕円形基調で、直径70cm～90cmほどである。柱抜き取り痕はPit 4・5・7で確認された。

出土遺物はない。時期は第8号住居跡との関係から熊野Ⅵ期以前という限定はできる。第6号掘立柱建物跡と共に熊野Ⅰ～Ⅱ期頃に遡る可能性がある。

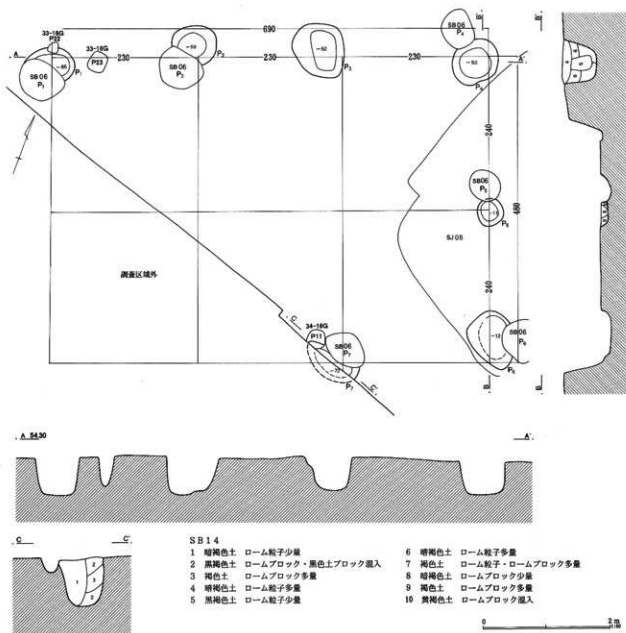
D区第19号掘立柱建物跡 (第536図)

D区第19号掘立柱建物跡は33・34-17グリッドに位置する。重複する第8号掘立柱建物跡を切り、第8号住居跡・第10号土壌に切られていた。

2×2間の建物を想定したが、北側桁行は変則的な3間、西側梁行は中間柱を欠く。また、北東隅柱(Pit 1)は第10号土壌に削平され遺存しない。規模は桁行長6.25m、梁行長4.10mである。主軸方位はN-68°-Eを指す。

柱間は等間に揃わない。北側桁行ではPit 1とPit

第535区 D区第14号掘立柱建物跡



7間にPit 8が入る。南側桁行の中間柱も、中間からずれている。柱筋もややずれ気味である。建物の中軸線上にPit 9・10が乗るが、桁行の柱筋とは対応しないなど整った形態の建物とはならない。

柱穴は楕円形または円形で、深さは20cm～60cmで

3. 掘立柱建物跡(中世)

D区第1号掘立柱建物跡(第537区)

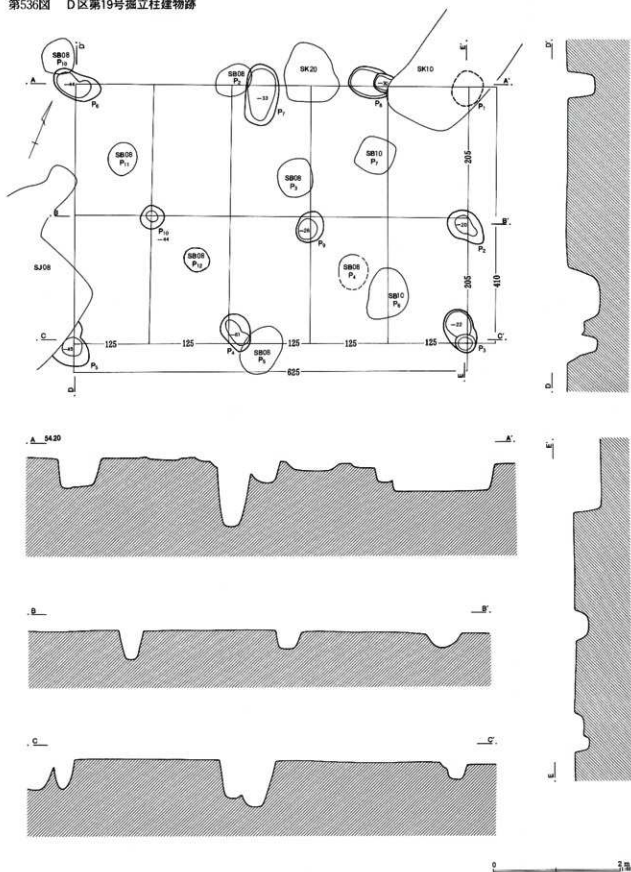
D区第1号掘立柱建物跡は31・32-15・16グリッドに位置する。中世建物群の一角にあり、第15・16・18

ある。

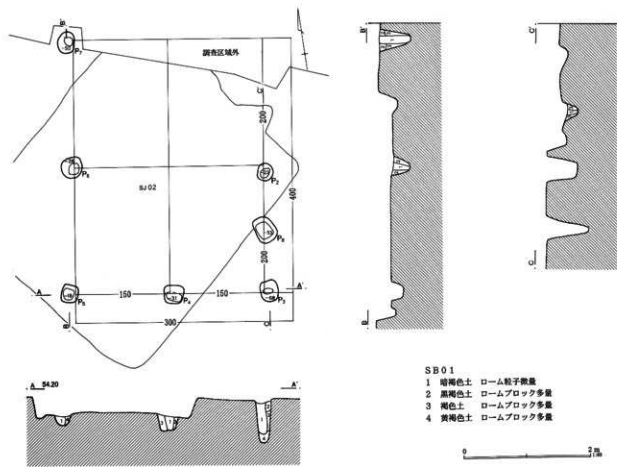
出土遺物はない。時期は不明確であるが、第14号掘立柱建物跡と軸を揃えて並列しており同時期となる可能性はある。

号掘立柱建物跡と重なるが、直接柱穴相互の切り合いはない。また、重複する第2号住居跡を切っていた。

第536图 D区第19号掘立柱建物跡



第537図 D区第1号掘立柱建物跡



- SB01
- 1 暗褐色土 ローム粒子散見
 - 2 黄褐色土 ロームブロック多量
 - 3 褐色土 ロームブロック多量
 - 4 黄褐色土 ロームブロック多量

0 3m

調査区外に掛かるため正確な規模は不明だが、現状で2×2間、南北棟の側柱建物である。規模は桁行長4.00m、梁行長3.00mである。主軸方位はN-6°-Eを指す。

柱間は桁行2.00m、梁行1.50m等間となる。東側桁行柱列にはPit 8が乗るが伴うか否かは不明確である。柱筋は通っている。

柱穴は小型の方形プランで、一辺30cm前後、深さは50cm前後と比較的深い。柱痕はPit 8を除く柱穴から検出された。

出土遺物は土師器甕、須恵器甕の破片が出土している。図化可能なものはない。

建物跡の時期は柱穴形態から中世と推定される。

D区第7号掘立柱建物跡 (第538図)

D区第7号掘立柱建物跡は33-17グリッドに位置

する。重複する第8号住居跡を切っていた。第15号土壌との関係は不明である。

2×2間、南北棟の側柱建物である。規模は桁行長4.25m、梁行長3.00mである。主軸方位はN-16°-Eを指す。

桁行の柱間は北から2.20m、2.05mとなり、等間に揃わない。梁行のそれは1.50m等間である。柱筋はPit 3がずれるが、概ね通っている。

柱穴は小型方形で一辺20cm~25cm、深さは14cm~51cmとばらつきがある。

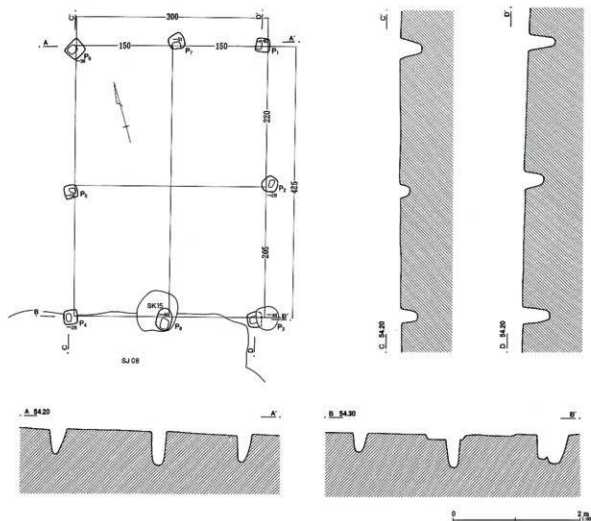
出土遺物は土師器杯・甕、須恵器杯片が少量出土した。図化可能な遺物はない。

建物跡の時期は中世と推定される。

D区第13号掘立柱建物跡 (第539図)

D区第13号掘立柱建物跡は 32-33-15グリッドに

第538図 D区第7号掘立柱建物跡



位置する。重複する第13号土壌を切っていた。

2×2間、南北棟の側柱建物で南妻に廂が付く。

身舎の規模は桁行長4.40m、梁行長3.00m、廂の出は0.90mである。主軸方位はN-6°-Eを指す。

柱間は桁行2.20m、梁行1.50m等間に揃う。柱筋は概ね揃うが、北妻側のPit 4がやや外側にずれる。南妻側中間柱は検出されなかった。東桁行のPit 6とPit 7間にはPit 10・11が入るが、伴うかどうかは不明である。

柱穴は小型方形プランで一辺30cm前後、深さは25cm～60cm前後である。

出土遺物はない。建物跡の時期は柱穴形態などから中世と推定される。

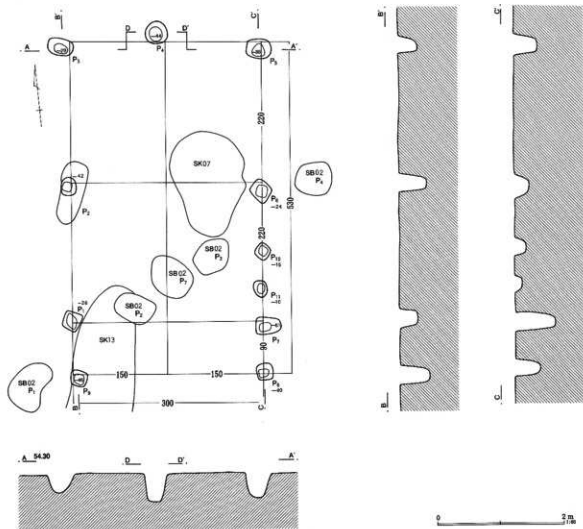
D区第15号掘立柱建物跡 (第540・541図)

D区第15号掘立柱建物跡は31・32-15グリッドに位置する。重複する第2・3号住居跡を切っている。

4×2間の建物で南妻側に廂が付く。規模は桁行長7.30m、梁行長6.40mと大型である。主軸方位はN-1°-Wを指す。

柱間は等間に揃わず、西側桁行は北から1.60m、1.60m、1.90m、1.50m、梁行の柱間は西から3.00m、3.40mとなる。廂の出は0.70mである。東側桁行柱穴は不明確な点があるが、変則3間となり、西側の柱列に対応しない。また、Pit 5・16～19は柱筋に乗るが、規則的な配置を採らず、伴うか否かは不明である。

第539図 D区第13号掘立柱建物跡



柱穴形態は小型の方形プランで、一辺15cm～30cm前後、深さは9cm～53cmと揃いである。

出土遺物はない。建物跡の時期は柱穴形態から中世と推定される。

D区第16号掘立柱建物跡 (第542・543図)

D区第16号掘立柱建物跡は31・32-15・16グリッドに位置し、重複する第2・3号住居跡を切っている。

調査区外に掛かるため正確な形態や規模は不明確であるが、現状で4×1間、南北棟の建物で西北側に廂状の柱穴列が延びる。身舎の規模は桁行長10.45m、梁行長4.90mである。主軸方位はN-1°-Wを指す。

柱間は等間に揃わず、桁行が北から3.00m、1.60

m、3.40m、2.45mである。梁行はPit10が中軸線上に乗るが、他に柱穴はなく不明確である。柱筋は概ね通っている。身舎の西側に付く柱列を仮に廂とすると、軒の出は1.80mとなる。

柱穴は小型の方形プランで、一辺20cm～30cm。深さは20cm～30cm前後のものが多い。逆に廂柱のPit12～14は50cm～75cm前後と深くなる。

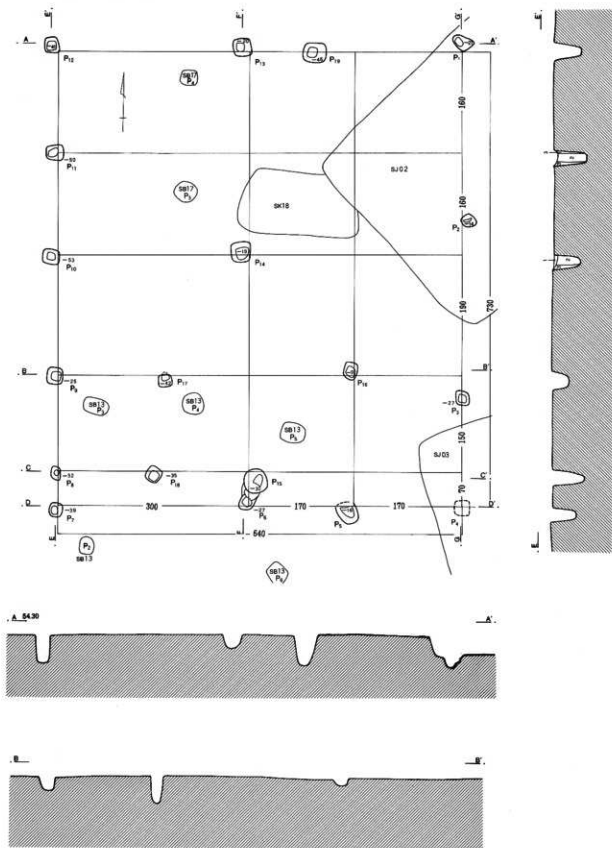
出土遺物はない。建物跡の時期は柱穴形態から中世と推定される。

D区第17号掘立柱建物跡 (第543図)

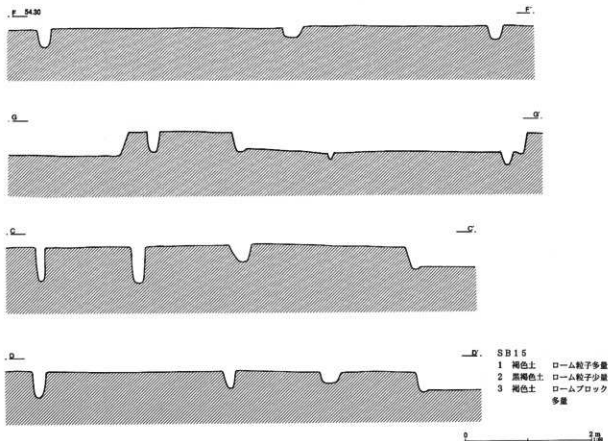
D区第17号掘立柱建物跡は31・32-15グリッドに位置し、重複する第18号土壌に切られていた。

2×1間、南北棟の小型建物である。規模は桁行

第540图 D区第15号掘立柱建物跡(1)



第541図 D区第15号掘立柱建物跡(2)



長3.80m、梁行長2.40mである。主軸方位は $N-6^{\circ}$ —Eを指す。

柱間は西側桁行1.90m、東側桁行には対応する中間柱はない。柱筋はPit4がずれ気味であるが、概ね通る。また、Pit6～8は柱筋に乗るが、規則的に配

置されず、遺構に伴うか否か不明である。

柱穴は小型の方形プランで、一辺約20cm～35cm、深さ18cm～52cmである。

出土遺物はない。建物跡の時期は柱穴形態から中世と推定される。



D区第18号掘立柱建物跡 (第544図)

D区第18号掘立柱建物跡は32-15・16グリッドに位置する。重複する第2・3号住居跡を切っていた。

2×2間の建物と考えたが、北東隅柱が検出されず、問題点は残る。規模は桁行長4.40m、梁行長3.80mである。主軸方位は $N-3^{\circ}$ —Eを指す。

柱間は桁行が西から2.00m、2.40m、梁行は北から1.80m、2.00mである。西側の梁行にはPit5とPit6を等分する位置にPit9が掘り込まれている。柱筋は概

第542图 D区第16号掘立柱建物跡(1)

